

つてゐるから、ぜひ明日、と話してゐるところへ、下から佐山が上つて来たので、二人はそこで會話を打ち切つた。

佐山が現れると、半田の態度はけろりと以前の恰好に一變してきて、今度は何の話をするかと思ふと、田原とかいふ、退職陸軍中將で、目下は何とか局の局長で、兼ねて何とか會社の重役見たいになつてゐる、有名な實業家の息子と、外に何とか言ふ男爵の次男と、その他二三の、總て自分よりはつと上等の身分の子弟たちと共に、(彼等は皆半田の親友なのださうだ、)今度田原の父の手で陸軍の方から一切の皮革類の拂下げをして貰ふことになつて、それで非常に有望な株式會社をこしらへるのだ、その下相談會が四五日中に催される、それ等の人たちは皆多少文學のたしたみのある人たちで、幸ひ佐山の名を知つてゐるから大變都合だから、その時に出席して、以後、面倒だがその會社の記録の方の用事で時々相談に乗つて貰ひたい、その代り金ほうんと出させるが、どうか？ それは先づ差當つてその會社の定款を三枚位でいいから書いて欲しい、それはそれで別として、まあその他に原稿料として五百圓は拂はせる、その方は三四日内に催される下相談會の時に、手附といふと何だが、貰つておいても差支へないでせう、ね？ 三百圓だけは屹度出させることにするから、是非來ていただきたい、と言つたやうな、私などには極めて縁の遠い、だが盛んな話が始まつたものだ。「ね、來て下さいね、」と半田はそして幾度も駄目を推すやうにして言つた、「屹度來て下さるでせう、

ね、僕が迎ひに來ますから、ね、自動車で、先生、今度は此間見たいに酔拂つても大丈夫ですよ、若いのも年増でもお好み次第の接待役を置いときますから、アハハハハ……」と彼は例の氣になる口附を十分に發揮して笑ふのだ。

「ええ行ますよ、行きますとも、」と佐山は口髭の上に手を翳して、左手を盃で持ちながら答へるのだ。

「ね、ぜひ定款を書いて下さいね、三枚位でいいんですから。」と半田。

「ええ、書きますよ。」と佐山。

——と言ふやうな話は、どうも餘り神経系統の強くない私には、決して心よい刺戟ではないのだが、悪い癖で、立ち際のはきはきしない私はそれでも去り兼ねて、もちもちしてしてゐると、今度は半田が私に向つて、

「住友君、」とその飛び出した目をぎよろつかして、例の氣になる口を開いて言つた、

「君は津田沼で當分静養するつもりで、あそこの役場に勤める氣はありませんか？ 勤めるツたつて僕がうまく談判しますよ、なアに、九時頃から行つて午後三時か四時頃まで、ただ行つて椅子に坐つてさへすれやいいんです、少し馴れたらそこから寫生にでも何でも行けますよ、氣樂ですよ、そして勉強が出來て……。役目は、——助役が病身なものですからね、——その助役の助役といふやうなものなんです。僕はもう半月ほど前から村長に頼まれて、昨日も途中で遇つたら、誰かお友達にでも椅

子に坐つてくれる人はないか、と言ふんです。保証人が二人入るんですがね、それは僕と、外に村で一番の資産家で貴島といふのが僕んとこと懇意なんですが、その人と二人で保証人になりますから、ね、どうです？」

「僕のやうな者でもなれるんですか？」と私は膝を乗り出したことであつた、私には外のことを考へて見る餘裕なぞあり得ようがなかつたのだ。この年になる迄、及ばずながら働んで来た繪をかくことも、土にかじり付いても東京を離れたくないといふそれ迄の考へも、をんなとのいきさつ以来姥捨山へのやうに捨てて顧みない母のことも、さては半田の話の真相も、何も考へる暇を持たなかつたことだ。私が別れた、だがいつ舞戻つて来るかも知れない私の厄介者のをんなから、又あの善良には違ひないが、やつぱり恐い髯の三百代言から、そして水族館の帳場部屋のある下宿屋から、逃げ、且自分の身だけどうにか入れて匿まつて養つてくれる巢さへ出来ることなら、それが本當に膝を容るゝだけの部屋であり、文字通り口を糊するだけの暮しであらうとも、助役の助役が燈臺守でも別荘番でも何でも厭ひはしない、と考へたのは、凡夫の事なら大した無理からぬ次第に違ひないのだ。「僕で勤まるのなら、僕はもう當分繪なんか止してもかまひません、何とかお世話をして下さい、」と、諺に言ふ「地獄で佛」に會つたやうな嬉しさで、さうなると相手の氣になる口附さへ今はもう目に入らないのだ、私は彼の袖に縋るやうにして頼んだことだ。

「君さへ承知なら、いつでもお世話しますよ。」と半田は威勢よく、だが多少空元氣らしいのが氣になつたが、言つてくれた。

「だが、お互にもう少し考へてから極めた方がいいでせう。」その時佐山が傍から口を出して、「半田君、さあ、熱いのを一杯どうです？」と彼は確に、私の邪推ではなく、私たちが若い者同士が仲よくやることを願はないらしく、多分老人持前の嫉妬心からであらう、私たちの話の進行をどうかして妨げるやうに見えたことだつた。

そこで、それから又彼等同士で頻りに盃の遣り取りをしながら、先の皮革會社に就いてやら、かと思ふと文學美術などを以て生活しようといふことの非常な心得違ひであるといふことに就いての色々な話やら、飛んでは何酒が最もうまいか、金釜が、月桂冠か、福娘か、とか、どこの料理屋の酒はどうだ、とか、嘗て飲んだ酒の話に就いてやら、さうして縦横に歡談を交してゐるうちに、半田の顔色がだんだん青くなつて来て、その善良らしい、ぎよろりとした目が更に一層妙に突き出て来たやうに見え出したかと思ふと、彼は、

「住友君、一寸失敬します、先生、御免。」と挨拶して、その場にござりと手枕をして横たはつたかと思ふと、忽ちぐうぐう鼾をかき出したが、それから三分間も経つか経たない時分に、けろりとした顔をしてふらふらと立上つて、何とも言はずに、便所にも立つたのだらう、下に下りて行つてし

まつた。  
 だが、私が彼が直にも坐に戻つて来るのを心待ちに熱心に待つてゐるにも拘らず、ちつともさういふ色配が見えない上に、彼がゐなくなると共に、佐山の態度が急に無愛想になつてしまつたものだから、一向話がはずまなくて、困つて、

「半田君はどうしたんでせう？」と彼に聞くと、彼は

「下で寝てるんでせう」と極めて冷やかに答へる切りなので、私は折角見出した希望の光りであるところの、津田沼の役場の話に十分心を残しながらも、どうにも居堪らなくなつたので、

「では失禮します。」と氣を引くやうに言ふと、相手は待つてゐたと言ふやうに、

「さうですか、ぢやあ……今日半田君と外に一寸込入つた話がありますから、」といふ挨拶なのだ。で、すつかり斷念して、段梯子を私は佐山に送られながら下りて來ると、玄關の次の間のところに、半田がぐうぐう呻しながら、多分佐山の細君に掛けられたのだらう、蒲團をまとうて寝てゐたものだから、一寸挨拶しようと思つて、「半田君、半田君！」と聲をかけると、後からつづいて下りて來た佐山が、「いいでせう、少し寝かしておく方がいいでせう、私からよく言つて置きます。」と、又も追ひ立てるやうに言ふので、何か悪いことでもしたやうに、あわててそこに彼に挨拶して外に出て、ばかに赤い色に見える十一月の日光を浴びた町の景色に接すると、今迄のことが夢のやうな氣が

したものだ、そこには走る車も、歩いてゐる色々の人も、犬も、自動車、電信柱も、巡查も、何も彼にもが、佐山とも、半田とも、皮革株式會社とも、正宗とも、文學とも、津田沼とも一切何の關係もなく行動してゐると思へた。そんなものは皆謔か夢かでせう、と言つてゐるやうに見えるのだ。それに誘はれて、一瞬間私も一寸そんな氣がしたことだ。だが、夢か謔かであつてくれといくら望んでも、水族館の帳場の下宿屋は夢でも謔でもないのだ。私は泣けさうになる程困る氣に襲はれた。さすれば津田沼の助役の椅子よ、汝も亦夢でも謔でもなく、私に現はれて、私の今の難偽な状態から助けくれエ、と念じながら私はとぼとぼと赤い日の輝く町を歩いたことであつた。

二 さ 迷 る 魂 へ その二

「主よ私に正しい生活を給へ」と口ずさむこと

五六年の間月日といふ車が廻らない二人のこと

その翌日、私はいち日首を轆轤首のやうにして、今か今かと半田六郎の訪問して来るのを待つてゐた。丁度私の部屋が、下宿の入口の、例の水族館の帳場部屋と相對した、左側取突きにあつたので、三十幾人の止宿人たちが尋ねてを來る客は言ふ迄もなく、帳場部屋にやつて來る八百屋魚屋の足音から呼び聲までに一々聞き耳を立てるだけで、十分神經衰弱になる程注意して、終には、その下宿屋のあ

る通りが横町なので、比較的人通りの少ない、その通りを歩いて通る人の足音にまで耳を立て、果ては机の前の障子を細目に開けて、そこに嵌まつてゐる千本格子の隙間から、町の様子を展望までしたが、そのうちに心細い日が暮れて、その時の私には十七歳の青年の戀人よりも待たれたところの彼が、到頭姿を見せなかつたものだから、そこへ無愛想な女中の手で運ばれた、全く砂を噛むやうな味しかなない夕飯を済ますと、私はこそそそと忍ぶやうに、水族館の帳場部屋の前を見て見ぬ振をして通り抜け、もうすつかり暮れてしまつた夜の町に出たが、時は十月の末なのだから、町の空氣はじわじわと水風呂に浸るやうに膚寒いのだ。貧乏人には時候の冬が敵だといふことは、言葉だけでは合點してゐたが、二十八歳のその秋の晩に、私は初めて、なる程さうだ、貧乏人には時候の冬は確に敵だわい、と心からさう思つたことだ。それ迄は如何に貧乏しても、まだその貧乏を人との話の種にする程の多少の餘裕を持つてゐたが、文字通り一枚一枚と着物を上から、それが他人の追剥なぞのせるでなく、自分と自分の手で剥いでしまつたことだから、誰を恨みやうもなく、一枚の夏のままの白木綿に白のメリンスの襟を掛けた、もう地が痛んで腋の下あたりがぼろぼろになつてゐる肌褌と、一枚の、正に膝が抜け尻が抜けようとする、最後の一つ手前あたりの風情のあるの給銘仙の着物と、よれよれになつた紡績の給羽織に胴震ひしながら、それでも町にはやつぱり明りがついてゐて、期日には間違へずに縁日も催されてゐたやうだ、だが、そんなところを當もなくぶらぶらするだけの

氣持の餘裕もないものだから、私は用ありげに大急ぎでそこを通り抜けて、そこから二三町行つたところの、勝手知つた鶴丸の下宿の部屋を訪問した。

「鶴丸君」と廊下の外から障子越しに聲をかけると、中に大勢の人の氣色がしてゐたが、誰の聲だか、「おう！」と答へて、「お入りなさい」と言つたので、開けると、そこにはもやもやと紫の煙草の烟で風呂場をのぞいたやうな光景を呈してゐる中にも、六七人の人たちが車座になつて和製トランプをしてゐたが、それ等の人たちは總てその下宿の止宿人たちで、いつの間にか鶴丸と知合ひになり、引いて彼を屢々訪問する私とも知合ひになつた連中であつたから、「やあ、なかなか賑かですな」と言つて、私は遠慮なく部屋の一隅に適當な場所を見付けて座りながら、主人の鶴丸はどこにゐるのか、とそれは入つた時から物色したのであつたが、結局その場にゐないらしいことを發見したので、私の坐つた火鉢の向側に、和製トランプの仲間に加はらずに、所在なさうに煙草をぶかぶか吹かしてゐた一人に、「鶴丸は？」と聞くと、「あの君は、」と何處の國の産だが、その時初めて見かけた人物で、變な言葉癖を以て答へて言ふのに、「あの君は、この頃、國から親父さんが見えて居られるとかで閉口しとりますよ。僕はよく知らんのですがね、何でも親父さんは、この上いつ迄あの君を東京に置いていても、成功の見込がないから連れて歸るちふんださうです。この前にも一ぺんそんなことがあつたんださうですがね、その時はあの君が頑張つて、その代りに、屹度勉強するちゆふ約

東をしたもんだから置いてもらつたさうなのに、今度親父さんが来て見ると、前の時とちつとも變らない状態だもんだから、親父さんひどく怒つて、今度はどうしても連れて歸ると言ふとるんださうです。そんな譯で、あの君は此頃毎日感心に朝も早くから起きて、親父さんの泊つとる宿屋へ行きよるんださうですが、さあ、どうなるですか……」

「やあ、川下さん」とその時一勝負濟んだと見えて、斯う呼んで、例の車座の中から立上つて、私たちの火鉢の傍にやつて来た人物を、と見ると、太つた、太鼓腹をした、それに相當した布袋様のやうな顔の持主で、彼はそこに集まつてゐた人々の中で私の最も懇意にしてゐた、××省とかに勤めてゐる、月讀といふ變な名前の男だ。この男は、不斷は、その恰服が現すとほり、にこにこしてゐたが、一たび自分の姓名の話になると、忽ち襟を正して自分は月讀命の末孫だといふことを、相手が笑つて聞けば聞くほど、眞顔になつて辯じ立てる癖があつた。しかし、彼は、大體に於いて太つた男によくある憎氣のない男だつた。で、私はこの男ともこの下宿で初めて知合ひになつただけの間柄であるから、やつぱり川下といふ私の變名だけしか知られてゐないのであつた、彼が言ふには、「鶴丸君も今度は閉口してゐますよ、親父さんの言ふには、今度は歸らなけりや歸らないでいい、その代り金を一切送らないからと言ふんださうです、もつともこの最近には、毎月送つて来る金高が無斷で減らされて來ると言ふので、先生大分しよげてゐたところでしたからね、そこへこの有様だから、先生もど

うも今度は歸らない譯には行かぬかも知れませんが、猪食つた報いですから、アハハハハ」と彼はその太鼓腹を片手で抱へて揺するやうにして笑つた。その時、

「月讀君、抜けるのかい？」と和製ランプの仲間の一人が叫んだので、

「やるよ、やるよ、と叫んで、彼は威勢よく立上りながら、私に向つて、「どうです、あなたも入りませんか？」と勧誘した。

が、私は餘り好きなことでもなく、それにいかに呑氣者の私と雖も、目下の迫つた状態が考へられて、氣が腐つて、とても彼等の仲間に入る氣になぞなれなかつたことだ。日一日と近づいて來る月末のこと、就いては半田が今日來なかつたこと、明日は屹度來るだらう、來るなら、遙々津田沼から出て來るんだから、午前中にちがひない、さうだ、午前中だけ待つて見て、午後になつても來なかつたら、その時は何としよう？　こんな時に本屋の山本でもゐてくれたなら、どうせ目下は彼も彼自身の破産後の身の處置に困つてゐるに違ひないのだから、何のいい智恵も分別もつけてくれさうにはないが、それでも會つて色々話するだけでも心安めになる、なぞと考へたことだつた。そんなことを取止めもなく、そこはかとなく考へてゐると、その席にゐるのも少し苦痛である程愉快ではないのだが、と言つて、今夜あたりは尙盛んに速度を進めて、あの水族館の帳場部屋では、鯛の主人がお輕の手紙めいた書附の筆を走らせてゐるに違ひないと思ふと、とてもうかうかと十二時を餘り早く前に自分の

下宿には歸る氣にはなれないので、浮かぬ顔を頼杖で支へて、面白さうに和製ランプに熱中してゐる人々の騒ぎを傍に聞きながら、そして彼等の様子を見てゐると、時々、「主よ、私に正しい生活を與へ給へ、それしたら、賭博も、飲酒も、遊蕩も、即座に止めて見せます。」と言つた西洋人の言葉を思ひ出して、口ずさんだことだ。さうして一時間餘りも煙草ばかりふかふかと吹かしつづけてゐたがその時突然外の廊下に聞き覚えのある、異様な音を發する咳の聲が近づいて來たので、私ははつと生き返つたやうな氣持で顔を上げると、「今晚は御免なさい。」と障子の外に甲高い聲が叫んだ。山本の咳だ。

「山本さんですか？」と私は反響のやうに應じた。「お入んなさい、山本さん。」

聲のもとに、山本は獨得の愛想のいい笑顔を浮べて入つて來て、私の顔を見ると、「川下さんですか、暫くでしたね、此間から二度ばかりお留守中に伺つたんですが、お留守でした。……皆さん、今晚は、相變らずおそろひですね。」と言つて、私の傍に中腰になつて蹲んだ。

「鶴丸君がひよつとすると、國に歸ることになるかも知れないんですつてね。」と私が報告顔に彼に言ふと、

「さうださうですね。」と彼はもう夙に知つてゐるといふ様子で、一向氣の乗らなさうな返事で答へて、顔は和製ランプ仲間の行動に一心にそゝいでゐるのであつた。その横顔を見ると、彼の不思議

な頭の禿は、私が前に見た時とは、また場所を變へて、一層ひどくなつたものらしく、優に頭の五分の一を占めてゐるのに私は驚かされた。

「山本さん、この次から入りますか？」と一坐の大將らしい恰好で、毛だらけの、そして大根のやうに太い足を胡坐に組んで、勝負に熱中してゐた月讀が、當然のこの様に、顔を振り向けずに言つた。

「ええ、どうか。」と山本は、これも當然のこのやうに、答へた。

で、私はその場の様子から察して、「始終いらしつてゐるんですか？」と山本に聞くと、彼はきまり悪さうな表情をしながら、

「ええ、どうも毎日、内にはゐられませんが、金は有ませんし、仕様がなないもんですから……」と答へた。そのうちに、ばたばたと一勝負片づいたと見えて、今迄根が生えたやうにちつちつとしてゐた人々の頭が、急に林が風でも受けたやうにがやがやと動くと共に、「一寸、失禮。」と言つて半ば私を逃げるやうに山本はその中に割り込んで行つたので、私はまた落膽してしまつて、時々例の『主よ、私に正しい生活を與へ給へ、それしたら、賭博も、飲酒も、遊蕩も、即座に止めて見せます。』と云ふ言葉を、胸の中のむしやくしや退散の呪文のやうに口の中で稱へながら、元の無言の行に復ることを餘儀なくされたものだ。私の無言の行に引きかへて、傍の車坐の方はまるで宴席のやうにがやがやしてゐて、

中にも山本の甲高い聲が圖抜けて、「切札は何でしたつけない」とか、「それや少し手がひど過ぎますぜ」とか、「ぢやあ、斯うして置ませう！」とか、そしてその間を縫ふやうに「ヒツヒツヒツヒツ」といふやうな響を發するところの、彼獨得の笑ひ聲が聞えた。私は益々しよげ返りながらも、ふかりふかりと煙突のやうに煙草の烟ばかり吐きながら、陰氣な考へに沈み込んで、そして十二時近くまでの時間を潰すことに骨折つたことだ。だが、私の歸る時にも、和製トランプの車坐はなかなか止みさうにない騒ぎをつづけてゐて、「さよなら、」とそれに向つて挨拶すると「さよなら、」と二三人の聲が答へたが、無論上の空の返事に相違なかつた。

そして、又日が明けて翌日になつたが、豫定の如く私は午前中だけをさへ下宿に踏み止つてゐるところが出来なくなつた。といふのは、此間うちから夜を日に次いで、舖の主人が硝子張りの帳場部屋の中で長々と書いてゐたものが、止宿人の頭数だけの三十幾つかに適宜に切られて、それ等の一人であるところの私にも到頭その日、朝飯の膳の上に、箸の下に添えて出されたことであつた。まだ物價が今日程高くない時分のことだつたが、それでもその月の半分以上、私だけでなく、Hに行つたをんなの分が含まつてゐるし、それに彼女がゐる時分には餘計な蕎麥だの、一品洋食だの、菓子だのと毎日程取つてゐたので、何と合計五十何圓也と嵩んでゐるのだ。五十何圓がその半分の二十何圓でも拂へないことに於いては同じではあるが、それを見た恐怖加減はやつぱりその文字の數字に比例する

ものと見えて、その内の習慣として、金を拂ふ月末前後になると極まつて不斷よりは少々御馳走をすることになつてゐるところの、香の物の皿に奈良漬、それに鶏卵一箇さへ奮發してあつたその時の朝飯が、うまく咽喉を通らないのだつた。辛うじてそれを済まして、半田が、半田が……と彼の來るのを籠城中の援軍宜しくの思ひで待ちこがれたものだが、やがて入口一つ隔つた例の水族館の部屋から、ボン、ボン、ボン……と時計が九つ打ち出した時には、私はどうにもぢつと坐つてゐられなくなり、ふと一策を思ひついて、——この部屋も今日限り、だから大事なものだけは身につけて持つて出なければならぬ、とそこを見廻したが呆れたことにはそんなやうな物が半分とないのだつた、——だから、いつものままの恰好と内容で、こそこそと、出しなに、「お晝過ぎに歸りますから、もし半田といふ人が來たら、」と鶴丸の下宿の電話の番號を言つて、丁度日曜日だつたから、月讀の名を言つて、その人に知らしめてくれと頼んで、それから鶴丸の下宿に行つたが、鶴丸は案の如くゐなかつたので、月讀にその事を話して、もし下宿から半田といふ人が來たと電話が掛つて來たら、その人に電話口に出てもらつて、本郷の斯う斯ういふ所に私が待つてゐるから、そこに直電話をかけるなり、來てくれるなりするように言つてくれ、とくれぐれも頼んだ。それはやがて私の居所を探すことになるに違ひない下宿屋に私の行先を知られないための用心なのだ。さて私の出かけた本郷の友達といふのは、先にちよつと話した、佐山と同郷の、私を彼に紹介したところの、文學をやつてゐる人物なので

あるが、私は實はずつと以前に、繪の方の傍ら生意氣に文學をやらうと思つて、一二ヶ月ほど或私立大學の文科に籍を置いたことがあつたが、その時に學校で知合ひになつた以來の彼は友達でもあつた。それからもう五六年になるが、私は依然として乏しい繪の具で畫をかいたり、又最近の二年はヒステリーのをんなのために殆ど何にもしないで碌々と送つたことだが、彼、名を木戸參三と呼ばれる人物も、何をやつてゐるのか、いつ行つても雑誌を讀んでゐるか、私なぞには讀めないから一寸やらさうに見えるところの、原書の小説などを讀んでゐるか、或ひはそれを翻譯してゐるんだと言つて原稿紙をひろげて何か書いてゐるか、五年前も、一二年前も、彼にだけは月日といふ車がちつとも廻らないかのやうに、同じことをやつてゐるとしか見えないが、未だに一向頭角を現さないのであつた。人間は極めて大人しくて、善良で、眞面目で、その癖頭も悪くはなささうだし、人の話では語學は大變出来る男ださうで、念入りにも英吉利語と獨逸語と佛蘭西語とにまで通じてゐると言ふのに、一體何をしてゐるのだらう？ その日も私が尋ねると、枕元に二三冊の古ぼけた本と、回讀會の新しい新刊の雑誌と、原稿紙とを亂雑に散らかして、蒲團をすつぽり頭から被る癖と見えて、その中から三寸近くの長さに延ばした髪の毛の頭を半分のみかして、十一時に近かつたらうが、まだ「白河夜船」極とめこんでゐた。

「よを！ 珍らしいね」と彼は私に起されると、仰向いたまま、被つてゐた蒲團を頭の所まで引下げ

て眠さうな目を見張りながらいつた。それから、濟まないけど、そのこの柱のこのベルを押して、女中を呼んで火と茶を命じてくれ、とか、今起きるよ、とか、で、私は、いいよ、そのまゝにしてゐる給へ、景氣はどうだ何か仕事をしゐるか、相變らず貧乏か、なぞとそんなことを聞きながらも、心はその場になかつたことだ。半田はやつぱり來ないのかしら？ 來れば電話が掛るかここへ尋ねて來るかする筈だが？ とその事ばかり考へてゐるが、そのうちに私の方から何を言つても一向返事がないので、見ると、木戸はまた眠つてしまつた様子なので、私はそこらにある雑誌などを手當り次第に見たりしてゐると、突然、入口の方で、ガン、ガン、ガンと半鐘の音が起つた。私が驚いて目を見張つてゐると、

「やあ」と蒲團の中から、その音に再び目を醒ました木戸が叫んだ。「失敬、失敬、此頃はちつとも夜眠れないもんだから、今朝も四時頃に寝た始末だ、今、起きるよ……」

「何だい、あの半鐘は？」と私が、まだ五つ六つ鳴つて、その最後の音の餘韻がウーウーウーウーと響けてゐる鐘の音に耳傾けながら、聞くと、

「あれや十二時を知らず半鐘なんだよ」と蒲團の中からの聲が何でもなささうに答へた。「基督敎徒でね、この内か。お上が女子大學卒業生なんだが、彼女の趣味なんだらう、半鐘は。玄關の横手に吊つてあつたらう？」



女子大學卒業生の、基督教徒の下宿屋のお上の考案になる半鐘は頗る結構だが、それが十二時を報じたと聞くと、私は今日ももう半田は来ないのかな、と思つて大きに心細くなつて、「もう十二時か、困つたなあ、」と獨言ちた。

「どうしたんだい、十二時が困つたといふのは？」と木戸は漸く腹這ひの姿勢になつて、その長い髪の毛の頭を振りながら、色黒の、これと言つて特長のない、小さな顔を上げて聞くのだ。

「いや、なアに、別に大した事ぢやあないんだがね、」と私は言つた。「年年歳歳一向改まらない月末の心配だよ。君の方は近頃どうだい？」

「いづこも同じ秋の夕暮だよ、」と彼は柄にない言葉を吐いて、後は恥かしさうに笑ひにまぎらした。

「でも、」と私は執固く追究して、「下宿屋の月月の拂はどうにかやつてるんだらう？」と聞くと、

「どうしてどうして、」と彼は言つた。「今月で丁度半年たまつてるんだ……」

私が驚いて、「そんなによく待つてくれるね、僕んとこなど、とてもそんな譯にはゆかないよ、」と言ふと、

「ゆかないつたつて、なけれや仕様がなぢやないか？」と相手は身體に似合はず中中太いことを言ふのだ。

「催促しに來ないかい？」と聞くと、

「それやたまには來るさ。」

「たまに位かい？」

「まあさうだね。」

「その基督教徒のお上が來るのかい？」

「いや、來るのは女中だがね。だが、女中相手にしてゐたんぢやあ氣かきかないから、返事や言譯はいつもお上宛に文章で、それを女中に持たしてやるんだ。今度はさすがに半年目にもなるものだから、いつもと違つて彼女の方から先を越して手紙をよこしたよ。」

「やつぱりお輕の手紙見たいな長いやつかい？」

「何だのお輕の手紙といふのは？……レター・ペーパー一枚だよ。」

「返事を出したかい？」

「今度は困つたよ、あんまりもういつも女中に、女中だつて内容ぐるゐ感じるだらうからね、此方からの手紙をことづけるのも少し恥かしくなつたから、昨夜も寢てから考へたんだが、表へ出て郵便箱にはふり込んで來ようかと思つてるんだ。」

「馬鹿にしてるね、ハハハハハ。」

「だつて仕様がなぢやないか？」

だが、實は私自身はこの呑気みたいな會話の後、益益心細くなつて來たのであつた、といふのは、大抵駄目だらうとは思ひながらも、若しかして彼がどうにかうまく下宿屋を過ごしてゐたなら、たとひ一日でも二日でも居候においてもらはう、とさうはつきりではないが、意識の底で多少の期待をしてゐたからだつた。會つたら多少の金を借りよう、とやつぱり暗暗のうちに期待してゐた山本とは、昨夜あんな状態で會つて別れたことだし、今また木戸がこんな風なので、愈々望みは津田沼の新らしい友達の半田一人にかかるのだが、その半田を待つことが、今は又夢よりもたよりない感じになつて來たのであつた。そして自分も、半鐘で嚇かされてもいいから、こんな寛大な、基督教徒の下宿屋に下宿して置けばよかつた、と木戸の身分が大きに羨まれたことだ。が、今更羨んだつて、今までの水族館の下宿屋に下宿したことを取消す譯には行かないことだ。

「君は一體怠け者だからいけないんだよ、」とそれから私は黙つてゐるのも辛いので、途方もない、但し冗談めいた口調でだが、非難の矢を向けたものだ。

「怠けてるもんか、君、」と、すると、木戸は恨めしさうにその小さい、黒い顔を蒲團の中から突出して、「それどころか、當のある仕事はちつともないんだ、と言つて、手を束ねてゐると變に心細くて堪らぬ氣がする上に、さうしてゐると頭ばかり活動しやがつて、厭世觀ばかり發達して、退屈病が膏盲に這入るもんだから、と言つて僕はその憂さ晴らしの小説も書けないもんだから、手當り次第に

翻譯をしてるんだよ。大したもんだよ、僕がこの一年半程の間に、こんなものなら賣れるだらうか、あんなものならどうだらうか、とやりもやつたもんぢやないか、コナン・ドイルもあるし、タゴオルもやつたし、ロオラン、ロマン、チエホフ、ストリンドベルヒ、オウ・ヘンリイ……みんなで彼れ此れ三千枚ぐらゐ、その押入の中に古新聞と一緒に積んであるよ。がまだ一つもそれが僕の名前で賣れたものはないんだ。そのうちに流行が後れてしまつてね、」と言つて、變にうそ寂しい笑ひ方をする男で、「ウフフフ、」と彼は威勢のない聲で笑つて、そしてつづけた。「もつともそのうちには二つ三つ人の名前で賣つたものはあるが、それでまあ六ヶ月前までの下宿料になつてゐたんだがね。君、知つてゐるだらう、佐山？ 彼のところへも二つばかり、もつとも今ぢやあもう彼の名前で買ふ本屋もないだらうがね、せいぜい彼の名前で通用しさうなものを持込んでいたんだよ。ところが、いつ迄經つても賣つてくれないのはいいがね、最近に何かの新聞の廣告で見ると、どうだ、僕はその翻譯を燒直して、「何とか何とか物語」だなんて、すつかり先生自家薬籠中のものにしてしまつてゐるんだ。でね、此間催促のつもりで訪問したら、どうも近頃出版物は不振らしい、殊に翻譯物はてんで駄目ださうだと言つて、僕の原稿を返すんだよ、そしてその著書の燒直し問題に就いては一言も斷りなした。僕は何とも言はずに歸つて來たがね、ウフフフ……さあ、今度こそ起きようかな、」と言つて、彼は龜のやうににゆうと首を蒲團の中から突出したが、「やあ、もう朝夕は寒くなつたね。……しかし

彼も無理はないよ、前の細君の子供が二人と、前の細君の子が一人と、そこへ今度のあの細君、あれはどこかの馬肉屋の女中なんださうだがね、身持になつたもんだから、丁度前の細君に逃げられた後釜に据ゑられたんださうだが、それが生んだのが双子と來てるだらう、いつそ僕に賣れないのなら、そして彼が僕の十倍も困つてゐるのなら、僕の翻譯をもう二つや三つ提供してもいいかも知れないがね。……僕だつて此間はちよつと腹が立つたよ、ウフフフ。……」

「その筆法で言ふと、私は言つた。「僕も君から思ふと、母親といふ者を一人餘計に背負つてゐる譯だから、君の翻譯原稿を一つ位ただで貰ふ資格があるかもしれないね。」

「どうせ賣れないんだ、いつでもお好みのものをやるよ。コナン・ドイルかタゴオルか、チエホフかストリンドベルヒか、それともオウ・ヘンリーか?……」

そして二人で、洞穴の中のやうな響を齎す聲で笑つたが、その瞬間、ふと又私は津田沼の半田のことを考へ出して、彼の姿も見えないし、彼からの電話も掛らないのが無性に心細く感じられたものだから、いきなり黙つて飛上るやうに立つて、玄關脇の、成程、半鐘の吊つてある、その隣の電話室に入つて、鶴丸の下宿に電話をかけて、月讀を呼び出したところが、電話口に出て來た聲は彼のはなくて、鶴丸ので、

「やあ、暫くでした、」とその聲が言ふのだ。「僕、愈々今夜の汽車で親父に引張られて國に歸らねば

ならぬことになりました。厭で厭で仕様がないうですけど、もうこの上は一文も金を送らないと言ふもんですからね、さうなると生死問題ですからね、仕様がありません。今度は又いつお目にかかれま

すか……」

その聲が、彼のいつもに似ず、ひどく悲しさうなので、私は急に一寸でも彼に會ひたくなつたものだから、「まだ一二時間はそこにゐますか?」と聞くと、「今親父が來てゐましてね、これから又彼のお供をして麴町の親類まで行くところなんです、」との答なのだ。が、つかりして、「ぢやあ、さやうなら、」とさやうなら、と電話を切つた。そして切つてから、肝腎の初めの用事を思ひ出して、又あわてて電話をかけ直して、それがなかなか混線かなんかで通じなかつたが、やつとして通じて、鶴丸を呼ぶと、今度は先の反對に月讀が出て來た。「僕の下宿から、さつきお話しした電話が掛つて來ませんか?」と聞くと、「いいえ、掛りません、」と言ふ。そこで切つて、なんだ、掛けるだけなら此方から掛けても差支へない譯だ、と思ひ直して今度は直接に下宿にかけると、鯛の主人の聲で、「誰もお見えになりません、」との答へだ。

「さう、ぢやあ、」と言つて切つてしまつた。そして私がしをれ返つて木戸の部屋に歸つて來ると、彼は依然として、蒲團の中から首を突出したままで、ぶかぶかと眞鍮の煙管で煙草をふかしてゐた。それから、私はもう氣持がぢつとしてゐられなくなつたので、たよりにならない人間たちではある

といふものの、その木戸がこの状態だし、その鶴丸が今夜切り東京から姿を消してしまふことだし、何と胸の中を北風が吹き通すやうな氣持に襲はれたことだ。その時私の袂の中には電車の復の切符と金十銭があつたきりだ。で、木戸に無心すると、彼は一文もないと答へた。私が津田沼行き事情を打明けて重ねて頼むと、その位なら何とかしようと言つて、彼は押入の中から古新聞と古雑誌とを出して来て、それを、層屋を呼んで、賣つてくれたが、それが三十銭にしかならなかつた。津田沼往復五十銭には十銭不足だが、それでもよし、それでもよし、有難う、と言つて、貰つて、袂の中に金四十銭をぢやらぢやら鳴らしながら、私は兩國の停車場に向つたのであつた。

### 三津田沼行 その一

火薬庫の番兵や法界屋の夫婦の境界を羨むこと

ヒステリイが恐ろしい傳染病であることを發見すること

千葉縣なんて同じ日本の國に違ひはなからうが、自分とくつ附けて考へたことなどはこれ迄一度だつてなかつたし、まして津田沼なんて名前さへ聞いたこともない所に、だが、来て見れば、何處の田舎の停車場の前も殆ど版で押したやうに同じ光景を呈したものだ、驛前の旅籠屋や、支度所や、ガタ馬車の出入する所や、折からその客を呼ぶ喇叭の音が、夕暮近い時刻のこととて、センチメンタル

な調子に鳴り渡つてゐたことだ。だが、私の行かうとするところは、それさへ通じない海沿ひの村とかで、教へられたままに、私は鐵道線路を横切つて、何かの聯隊の前に出て、それが近道だと教へられたので、その聯隊を仕切つてゐる土手に沿つて、大きな大きな原つ場に進んだ。ふと傍に立つてゐた立札を見ると、練兵中は通行を禁止するとか何とかと認めてあつたからそれは練兵場なのだらう、路さへつゝいゝないその凸凹の草原は、私の行手の方に無限に廣がつてゐるやうに見えるのだ、その果が海につづいてゐるのだから。更に私の驚いたことには、そこでは太陽の色さへ違ふと見えたことだ。なる程、日の暮に近いことだし、秋のことだし、少しは赤いのも不思議はないが、その草原の光景と來たら、これや世界がどうかなるんぢやあないかな？と思はれた程、一面に紅殻でも撒いたやうに、眞赤なのだ。だが、兎に角妙にうそ寂しくて、しうしうと膚寒い風が吹いて、自分の吹く口笛の音さへ十里四方に響くやうな氣のする、「いづこも同じ秋の夕暮の景色だ。」おまけに兵營からは夕方方の喇叭が鳴り渡るのだ、喇叭の響が兵營の百の窓に震へるのだ。その中を進んで行くと、見渡す原つ場に、兵營と離れて、家の屋根のやうな形をした、規丁面な箱見たいな恰好をした丘のやうなものが見えるのだ。それも亦、言ふ迄もなく、着色したやうに紅いのだが、近づくに従つて、見ると、何かの家か藏かのやうなものを、高い土手で四角に圍つてあるらしく、中の家のほんの屋根の一部しか見えなかつた。何だらう？ 兵隊のゐる所には、時々をかしたな

のがあるもんだが、と思ひながら、南に向つて急ぐ私はその下を通りかかった。そこ迄来ても、まだ原つ場の果も見えなければ、つづく海のおもても顔を出さないのだ。その時、私はふと頭の上に人間の氣色がするので、驚いて見上げると、傍の背の高い土手の塀の上を、一人の鐵砲を擔いだ兵隊がそのりのそりと歩いてゐたものだ。私ははつとして、これは近づいてはいけないところを、うつかりするとその爲に牢屋にでも入れられるところを、歩いてゐるんぢやないかな？ といふやうな氣がして、と言つて急に足を早めると、尙怪しく思はれてはと、氣が引いたので、わざとその土手にもたれて腰を下ろしたものだ。私は何となく心細くてならないことだつた、行先のまだ見當がつかないし、生憎一人一人通らないし、此上は一言くらゐ叱られてもいいから、頭の上の恐らしい番兵の兵隊が、何とか聲をかけてくれたらいいがなア、とさへ思つたことだつた。さうなると、尙一層變に度胸が出て來たので、私は少し傾斜が強過ぎて具合が悪かつたが、兩腕を頭の下にして、仰向けに寝そべつたものだ。あたりの夕方らしく赤々と燃えてゐるのに引きかへて、天はなかなか牙え返つて高いのだ。困つたなア、何、何に困つたのか、何も彼も困るのだが、兎に角譯分らずにそんな獨言を言つて、溜息をついたことだつた。だが、兵隊はもう私の頭の上を背にして通り過ぎたものか、何とも聲をかけてくれないのだ、私は目を閉ぢたが、頭の中が煙だらけのやうに何にも考へがつかないのだつた。すると、暫くすると、二三分後のことだが、私かもう頭の上の兵隊のことを忘れてゐた時分に、突

然天から降つたやうに、

「おいおい！」と土手の上から聲がした。私が驚いて見上げると、私の鼻の下に髭が附いてゐるのを見たためか、それから、聲の主の頭の上の兵隊は多少言葉を改めて、「君、そんなところに寝轉んぢやあいけないぢやないか？……」

「はあ」と私は藻抜の殻見たいな聲で應じて、のそのそとお尻を上げながら、「一寸お尋ねしますが、新濱といふのは、ここを眞直に行つたらいいのでせうか？」と何と思つたのか、叮嚀に帽子をとつて聞いたものだ。ところが、相手の兵隊は、これも私見たいな氣質の男と見えて、忽ち鐵砲を持つてゐない方の手を舉げて、おくれ走せに土手の上から敬禮をかへして、

「新濱といひますか？」と彼は知らならしく、それを大きに氣の毒に思ふ調子で答へた。「知りません、が、こんな方に來ないで、向うの森の横に路があるから、あそこを東に三丁ばかり行くと人家のあるところに出る、そこで聞いて見給へ。」

「有難う、」と言つて、私は彼と別れ際に、「その建物は何ですか、君のその番をしてゐる……？」と聞くと、

「火薬庫であります、」と相手は更に叮嚀な言葉で答へた。

火薬庫と聞いて、臆病者の私はひどく驚かされたので、「有難う、」ともう一度禮を言つて、すた

すたと教へられた森の横の路に急いだ。そしてそこまで行つた時、やつと安心して、遙かにはなれて来た、四角な小山のやうに見える火薬庫の方を振り返ると、夕日を背にしてゐるものだから、眞黒にそれが影繪のやうに見える上に、これ又眞黒に小さく、玩具の人形のやうに先の兵隊の歩いてゐるのが見えたところで、「あの火薬庫の番兵の方がまだ俺よりいい身の上かな？」と思つたものだ。その時、私に羨まれたのは彼ばかりではなかつた、森の横の細道を通つて、家家の立ち並んでゐる村に出た時、第一に目に止まつた法界屋の夫婦をもさうだ。彼等は手に手をとつて、木賃宿へだらうが、塀に急ぐ小鳥の恰好で、いそいそと私の前を歩いて行くのだ。歩きながら、その男の方が、もう明らかに商賣のためではなく、手弄びのやうに「さのさ」を月琴で、足竝に合はすやうに、弾いて行くのだ、更に羨ましいことには、後から見ると、その連合ひの女が大層別嬪らしく見えるのだ。私も腕に覚えがあつたなら、彼等について行きたい氣が全くしたことであつた。

そして、やうやく新濱といふ村に這入つたが、汚い家ばかりの村のことだから、別荘といへば直分るだらうと思つたところが、それが分らないので、私はぶらぶらと殆ど端から端まで歩いたものだ。そのうちに通りすがりの、魚の臭のする漁夫の、小さな、表から裏までも見通せるやうな家の中さへも暗くなつて行つて、ぼつぼつと灯がつき始めたので、私は到頭我を折つて、とある家の前に立つてゐた氣のよささうなお爺さんに「半田といふ内は、別荘ださうですが、この邊にありませんでせうか？」と聞く、

「半田？」と言つて、お爺さんは目をしよぼしよぼさせながら考へてゐたが、「東京の人です、若い何にもしないで遊んでる人です、ね？」と言ふのだ。

「ええ、さうです！」と私が勢を得て答へると、

「それなら、とお爺さんは後の、海の方と反對の側の、丘を指差して、「この上にとお不動様があるから、その前を通つて半町ばかり行くと、垣を廻した家が二軒あります。その手前の家ですよ。」と教へてくれた。

教へられた、生垣を廻らした二軒の家といふのは直に分つたが、なる程、奥の方の庭も廣さうだし建物も上下で十間以上は十分にありさうな、立派な家だが、手前のは庭もさう廣くはない、(この間佐山の内で、半田が話してゐた、黒須とかの連中が銘銘勝手に土産に持つて歸つたといふ、鶏なんてどこにゐるんだらう?) 平家造りで、せいぜい二間か三間の、別荘といふ名を許されさうにない家だが、そしてその天然木の頗る風采の上らない門には、標札がなかつたが、先のお爺さんの言葉を信じて、その門の中に這入つて、三間ばかりの小路を行くと、ふと家の奥の方で一人の女が戸を閉めてゐる様子が見えたので、「御免下さい、」と聲をかけた。「半田六郎さんといふのはお宅でせうか？」

「はい、」と頭から被つてゐたところの手拭を取つた女を、と見ると、二十歳餘りの色の黒い、何だ

かにきびの跡や、多少現在のにきびさへあると見える、丸顔の何處と言つて歪んだところもない癖に小造りの頗る風采の上らない女中らしいのが答へて、「はい半田は私共です」と言葉も亦相當なぶつきら棒な調子だった。

「半田君はお出ででせうか？」と私が聞くと、

「はあ、」と彼女は、しまつた！留守なんだな、と瞬間に私を失望させたやうな、そのやうな氣の毒さうな顔付で言ふのには、「あの唯今留守なんですが、……あんたは誰方です？」

「ええ、」と言つて、私は馴れない内なものだから、困つて、「あの私は半田君と近頃お近附になつた者で、住友といふ者ですが……」

「住友さんですか？」と彼女は私を忽ち安心させたやうな、そのやうな大變要領を得た調子で、「あの、今日あたりあなたがお出でになるかも知れないつて、半田も申してゐたんですが……」といふ所から、先程からの言葉の調子から考へて見るのに、彼女はどうも半田の細君らしいのだ。さう言へばただの女中ではなさうにも見えるのだが、それにどうかした拍子には、その色黒の、可愛らしい口元で、白い、その齒の荒く大きいのが困るが、どこから見ても山出しに近い恰好ののだが、どこかに、はてな？と思はせる、言はば玄つぽい所も見えるのだ。彼女は言葉をついで、「あなた、停車場からずつとお出でになつたんでせう？ お會ひになりませんでしたかねエ？ あの、お午頃に東京

から佐山さんが見えましてね、今し方送つて行くと言つて出かけたんですが、さうすると、舟橋の方へ行つたのかも知れません……」

「舟橋といふと？」

「津田沼の、東京から言つて、一つ手前です。お通りになつたでせう？」

「すると、ここから二人で歩いて行かれたんでせうか？」

「ええ、舟橋なら、歩いて行つたんだらうと思ひますが……」

「ぢやあ、東京まででも歩いて行けるんでせうね？」と私は變なことを言つたものだ、といふのも、もしそのまま半田に會へなければ、四十銭から二十六銭で往の汽車賃を拂つた残りの銭が、今や十四銭しか袂に残つてゐないことが氣になるので、十四銭で、東京まで汽車に乗れるところ迄行つて、その後を歩いて行くより外にない、と心にかかつてゐたからだつたらう。「ええ、行けますとも、」と如何にも善良らしい半田夫人は、私の心も知らないで、「この村から隔日に東京へ出る飛脚があります、三時間とかで行くつて話ですからね。……まあ、しかし、もう歸つて来るだらうと思ひますからどうかお上り下さい、ね、どうか。」

と勧められるままに、心細くはあるし、多少先程から歩き疲れてもゐたので、大きに疊の上が戀しくなつてゐた時だから、私は恐る恐る上に上つたものだ。すると、早速火鉢と煙草盆などを出された

が、實は懐の都合でそれをも儉約して、半田がゐたらお先煙草にありつくつもりで買つて來なかつたものだから、もちもぢしてゐると、「煙草をお上りにならないんですか？」と聞かれたのを機會に、「いや、すふんですが、生憎買ひ忘れて來ましたので……この近くに煙草屋がありますのでせうか？」と言つて立ちかかる見えをした、顔が熱くなつて、腋の下から冷汗がにじみ出したものだ。すると、それには氣がつかないで、彼女は私を押し止めて、取敢ず刻煙草と煙管とを持出しておいて、それを自分で買ひに走つてくれた様子だつた。やがて、朝日を一つ買つて來て、それを私に勧めながら、彼女も一本とつてすひ付けながら、

「住友さんは、奥さんは？」と何かの話の後で、こんなことを聞いた。

「ええ、あつたんですが、もうありません」と正直なところを、可笑しな返事で答へたものだ。

「お別れになつたんですか？」と彼女は持前の頓狂らしい表情の目を丸くして言つた。「どうして？」

「あんまり、その、ヒステリイがひどいもんですから……」と言つて、私をかした男だ！・相手に聞いて見た、「奥さんはヒステリイはどうです？」

「ヒステリイつてどんな風になるんです？」と彼女は再びくるくると目を丸くした。

「どんな風につてね、いろいろありますよ、大變なもんですよ」と私は言ひかけたが、そんな説明をするのが面倒くさくなつて來たといふよりも、なかなか半田の歸つて來る氣色がない上に、最早や

日も暮れ切つて、部屋の隅隅が五燭の電燈の光がとどかないものだから、じわじわと暗くもなつて來たし、おまけにごろごろと遠くに海の音さへ聞え出して、大きに心細くなつて胸が板のやうにつまる感じがして來たので、ヒステリイに就いては切り上げて、「半田君は始終東京へ行くんですか？」と話を變へた。「いいえ、滅多に。」「不斷内で何をして居られますか？」「たまに本を讀んだり、後は掃除が好きでね、掃除ばかりしてゐますよ。」「文學の方は？」「さあ、どうですか？ 歌とかを時々作つてゐるやうですが、」「お酒は大分行けるんですか？」「いいえ、もつとも二三ヶ月前まではやつてたやうですが、この頃はすつかり止めてしまひました。」「どうも歸つて來られる様子がありませんね、いつも出られると遅くなるんですか？」「いいえ、さうでもありません。あなた、お腹がお空きになつたでせう？」「いいえ、僕は食べて汽車に乗つたものですから……それより、あなた、どうか御遠慮なしに……」「いえ、私はいつも斯うして半田が歸つて來ない時には待たされるんです。」「へえ！ 十二時が一時になつてもですか？ 僕の以前の女房なぞ、機嫌の悪い時には、一緒にお膳に着いた時だつて、もし僕が先に箸を下ろすやうなことがあると、ぶツと怒つてしまつて、ヒステリイを起して、もう食べないなどと言つたもんです、あんたは感心ですね。」（まつたく私はその頃他所の、それが普通なんだらうが、當り前の大人しい細君を見ると、却つてをかしいやうな、不思議なやうな氣がしたものだつた。）「まあ！」と彼女はくせらしく目をくるくるさして言つた。「ヒステリイといふのはそ



「なんですか？」「いやそんなんばかりぢやありませんがね。」と私は又ここで引返して来たヒステリックの話を半田に戻して、「一體、半田君はどうしたんでせうね？ あんまり遅くなると、東京に歸る汽車がどうでせうね」と言ふと、「汽車はまだまだありますよ、それに此頃は月夜ですから、」と彼女は心の底で期待する「お泊りなさい、」といふ言葉を一向吐いてくれないのだつた。

そこで又私は袂の中の十四錢を思出して、さて東京へ歸つて何處で寝ようといふことを考へ出すと、心細さが板のやうな感じのする胸から咽喉元まで込み上げて来たものだ、それに、そこ迄は二十町あるといふところの、停車場に發着する汽車の汽笛も聞えるのだ。その間には絶えずごろごろと海の音も響くのだ、その外ちよちよと虫の聲が雨の音のやうに聞えるのだ、カツチカツチと時計の刻む音もするのだ。私は無言であると、それ等の諸々の心細さをそそる音に惱まされるので、なるべく間をおかないように話をつづけたが、相手の女性もなかなか話好きと見えて、私に餘り骨を折らせない程に喋るのだつた。

「ぢやあ、あなたの奥さんは今はどうしていらつしやいますの？」と彼女は聞くのだ。

「藝者になつてゐます。」と私は答へた。

「まあ！ で、あなたの所にいらつしやる前には？」と彼女。

「やつぱり藝者をしてゐたんです。」

「奥さんが藝者に出てゐて、厭な氣がしやしませんか？」

「さうですね、」と私。「いい氣はしませんね。」

「さうでせう、」と彼女。「私が出てゐました時も半田が、半田はなかなかあなた見たいに大人しくないのですからね、それは毎晩毎晩來ましてね、私、本當に困りましたわ。」

「おやおや！ この女もやつぱり元藝者をしてゐたんだな、この女が？ この木綿のごつごつの双子の着物を着て、同じ半纏流の羽織の上から前掛を締めた、その着物同様ごつごつした恰好の、この女が？ だが、人間の職業なんてものは恐ろしいものだ、どこかにそれ等の藝者上りといふ恰好を裏切るものばかりに見えるこの女にも、どこといふことなしにちらりと支つばいところが見えるのは、——男の私を相手にする話振りやら、巻煙草をすふ様子やら、やつぱりさうだつたのかと思はせるものがあつた。」

「それで、あの半田から伺つたんですが、」と彼女の夫は何でも喋る男と見えて、斯う彼女は私に聞くのだ。「名前を變へて下宿して入らつしやるのは、その奥さんのためになんですか？」

「ええ、」と私。そして、仕様がなないので、餘り體裁の悪くない範圍で、どつち道決して體裁のいい話ではないのだが、人間といふ奴は不思議な生き物で、泥坊は泥坊に、乞食は乞食に、それぞれの虚榮心の抜けないものだ、かつたいにはかつたいの見えがあると見えるものだ。私もその流儀で、面白

可笑しく話したことだ、即ち二度までも藝者をしてゐた女房と墮落した話だが、その女房が如何にヒステリイがひどくて困らされたかと言ふ話、なかなかこの内のやうに一人で出してもうることがないの來なかつた、ある朝なぞ、彼女と世帯を持つてから一年以上も、一度も晝をかきに出たことがないの、寫生にと言つたら一人で出してくるだらうと思つて、如何にそれが職業でも、一年以上も別れてゐると、あの繪の具箱を肩にかけて外に出るのが、まるで下ろし立ての下駄でも穿いた時のやうに、變に氣恥づかしい氣がしましたよ、それにも拘らず、今日は寫生に行つて來る、と出かけようとする、おや、あなたも寫生に出かけることがあるの？ 私、寫生するところを見たいわ、と、どうです？ それでどんな繪が出来るもんですか？ 私はその時分どんなに一人で町を歩きたいと思つたか知れませんか、……ヒステリイのことなら、私はもう日本一の學者になりましたよ、だが、ヒステリイを繪にかく譯には行きませんからね、そこは文學だといひんですがね、アハハハハ、」なぞと。すると聞き手の喜び方は一通りではないのだ。「そしたら奥さんはどうしました？」「それであなたは黙つてゐたんですか？」「まあ、大變ですわね、……なぞと。

要するに、大きに呆れたり、驚いたり、何といふことでせう？ まあ、まあ！ 到底私などには思ひも及ばないことです、言語道斷な婦人ですわね、といふやうな言葉を吐きながらも、半田の細君は私に話にひどく好奇心を動かされたらしく、膝を乗り出して喜んで聞くのだつた。すると、馬鹿が！

調子に乗つて、決して名譽にならぬことを、得々として一々例まで擧げて、私が如何にそのヒステリイの女房に惱まされたか、といふことを辯じ立てたものだ。だが、その底に、さうして話で彼女を釣つてゐる間に、早く半田が歸つて來てくれればいいが、早く時間が経つて汽車がなくなればいいが、……と言つて、半田は歸つて來ず、汽車はなくなる、といふやうなことになる、彼女が大きに迷惑するだらう、私自身も少なからず閉口する、と思ひかひ思ひして、「半田君は歸つて來ないといふやうなことはありませんまいね？」と私は又改めて、先から幾度も聞いたことを聞き返したものだ。そして、「そんなことはありません、」との彼女の答を得て、又稍々安心の氣を取戻すと、それと共に又、相手に時間の觀念を忘れさせるために、一寸の間もおかずに先の話をつづけたものだつた。すると、やがて、私たちが話に夢中になつて、もう海の音も、汽笛の響も、一向耳に入らなくなつた時分に、肝腎の半田その人を待つてゐることを忘れかけた時分に、かさかさとした表の方に砂利道を踏む音が聞えて、たうとう半田六郎が歸つて來た。多分、その時間は東京行の終列車が二十町向うの驛を出た時分だつたらう。

「やあ、住友君、いつ頃來ました、随分待ちましたか？」と半田はがたごとと立て附けの悪い戸を開けて這入つて來るなり、一瞬間窺ふやうな目附で私たちの方を見てゐたが、そこに私を認めると、忽ち斯う不自然な程の歡呼の聲を上げた。

「あなた！」と、すると彼の細君は險阻な顔を彼に向けて、とがめるやうに言った。

「あなた、今頃まで何處に行つてたんです？」

「なアに、佐山が舟橋の××屋に下宿してゐる毛利昌光といふ小説家のところへ寄らうと言ふもんだから、そこへ行つて今まで止められて遊んでたんだよ。」

「お酒を飲んでますね？」と彼女は更に第二の矢を放つた。

「酒なんか飲んではないよ、ハア——」と彼は遠くから細君の鼻に向つて、——但し十分に嗅がれると困るといふ風に、息を吹きかけて言った。が、忽ち私の方に向つて語調を變へて、「住友君、本當によく來ましたね、随分待つたんでせう？ 今日泊つて行つてもいいでせう？ 歸るたつてもう汽車がありませんよ。……住友君に御飯をどうした？」などと私と細君とに交々言葉をかける調子が、これ又ひどく不自然に愛想がいいのだ。黙つて觀察してゐると、あなた、今頃まで何處に行つてたんです？ と先程彼女が彼をとがめたのも、それは客の私を待たして済まなかつたぢやありませんか、といふ意味よりも、半田に向つて、遅くまで外で何をしてゐた？ といふことを責めたのらしく、又、今半田が私を盛んに大聲で歓迎するのも、それは歓迎する以上に、不機嫌になりさうな細君をごまかす策らしく見えたものだ。

それから半田六郎と私との話、「すぐ分つたでせう？ どつちから來ました？ 練兵場を通つて？」

「あの邊の景色は非常に面白いですね。」「描けますか？ どうです、此方にずっと引越して來ては？ あつ此間の話ね、昨日村長が旅行に出かけたさうですから、もう四五日待つて下さいね。」と、そこで「なアに？ 何の話？」と細君が口を入れたものだ。すると、半田は何か言つて話を反らしてしまつてから、「ね、どこかこの邊に座敷を貸すところがあるだらう、八百屋の八公に明日でも來たら頼んで上げるといいね？」と言つて、又私に向つて、「それまでどうです、ここに、別に御馳走は出來ませんが、僕んここにちやあ？」そして又細君に向つて、「ね、住友君がどこかに間がある迄もて

もいねえ？」と賛成を求めたものだ。

無論、それ等の話は、火薬庫の番兵を羨み、法界屋の尻からくつ附いて行きたいとさへ望んだ私にとつて、この上ない結構な話に違ひなかつたが、變なもので餘り有難過ぎて、何だか背中がむづむづするやうな氣がしたことだ。そのうちに、又話が一轉して元に戻つて、それは多分彼の細君が口を切つたのだつたが、私のヒステリーのをんなに就いて出たものだ。さうなると、私は又一坐の話し手になつて、なるべく、先に細君に話したのと反覆しないやうな、別の例話で、何と私の困り者のヒステリーのをんなの話は、それに惱まされた挿話は、濱の眞砂と盡きぬのだ、いろいろと喋つたものだ。すると、それに對抗するやうに、彼等が代る代る彼等の身の上の口オマンスに就いて、私に話したときには、初め彼が放蕩時代に藝者をしてゐた彼女に惚れて、彼が彼女を誰にも無断で連れ出して伊豆

の温泉へ駈落したと、そこで金に窮して、東京の大きな米屋であるところの彼の両親の家に救の手紙を出して、彼の母親に来てもらつて、少なからぬ金を以てそれまでの片を付けてもらつたこと、そして一時二人は東京で同棲したのだが、半年程して、又彼女が藝者に出ることになつて、その藝者家の近所に彼は二階借りをして暮らしてゐたが、自分のをんなの藝者姿が見てゐられなかつたと言ふので、半月の後に再び彼の母に泣きついて彼女を受出してもらつたこと、それからこの津田沼の彼の家の別荘代りの持家に、二人あてがひ扶持で、押し込められた形で、斯うして暮らしてゐること、などであつた。

やがて、寢る段になつて、茶の間の奥の六疊に彼等二人の床が、そしてその一番奥の八疊に私の床が取られた、その外に、彼の小さな本箱と机との置いてある三疊の間と、それだけがその家の全部だつた。そこで、私は長い一日の疲勞を休めるために、私自身の、あの水族館の下宿に残して來た蒲團の三倍も上等のそれ等にくるまつて、お休みなさい、とそれは彼等二人にと、それから世界のどこの隅々にも遍在するといふ神様とに言つたつもりで、そして埋まるやうに横たはつたことだ。二十町離れたところの停車場を、もう一時を過ぎてゐたから、貨物列車でもあらう、ご—オと音して通るのも聞えるし、その外には絶えずごろごろと波の音が歩いて來るやうに聞えるのだ。と、その波の音の間に交つて聞える聲があるのだ、それは隣室から聞える話聲なのだ、切々でよくは分らないの

だが、殊に半田の聲の方が尙聞きとりにくいのだが、「住友さんなどは……」と頻りに私の名を言つて私を例に引いてゐるらしい聲は彼の細君のだ。「大人しい……あなたは……」などとそれが續くのだ。「ウム……ウム……ウム……ウム……」といふやうに彼の聲は聞えるのだ。「そんなヒステリーの……住友さんは……」と細君の聲が言ふのだ。「ウム……ウム……ウム……」と彼の閉口したやうな聲、そして絶えずごろごろと波の音。——

だが、それ等を私は三分以上と聞いてゐなかつた、せめて夢でも、竝の人間の、そんなに上等でないのでもいいから、結構な身分になつた夢でも見て、と思ふうちに……私は長い、色んなことあつた、一日の疲れに、死んだやうに眠り入つたことであつた。

#### 四 津田 沼 行 その二

IIの町を遠望しながらをんなの回想に耽ること  
飲めぬ酒を飲みながら歌澤を教へ教はること

「それで君は」とその翌朝、朝の日の射す椽側に蹲みながら、半田が私に言ふのだ。「そのヒステリーの細君ともうこれ切り別れてしまふつもりなんですか？」  
「ええ、まあさういふつもりなんですが、」と私は何故か顔を赤くし答へた、恐らく私が彼女を厭に

なつたから、藝者に賣つてしまつて顧みないのだらう、と相手に思はれてはしないか、とでも考へたものか? 「だが……」と私はつづけた、「彼女がもつと年をとつて世間の苦勞に曝されて、そのためにヒステリーの氣がなくなりさへしたら、無論病氣でせうが、四分や五分の我儘も十分に混つてゐるやうですから、それがなくなりさへしたら、どうして一年でも一年半でも同じ釜の飯を食べ合つた者を愛すなど言つて、愛さないでゐられませう?」と言つてゐるうちに、元もと随分だらしない、大きな涙囊を持つた私のことだ、をかした氣になつて、涙ぐまれて來たものだ。すると半田夫婦は共涙を誘はれた形で、それに年若い夫婦者が獨身者を見ると往々起すのを常とするところの、早く相手の人間も一對にしてやりたいものだ、といふやうな心を起したと見えて、彼等は口をそろへて、「屹度今によくなされるでせう、それ迄にあなたも早く勉強していい畫家になつておいて、一緒になつて上げるといひんですね、」と言ふのだ。

その椽側からは、丘の下の昨日の夕方うろろと私がそこをほつつき歩いたところの、一本道に沿うて立ち竝んでゐる村の汚い家々の屋根を越して、どこか動いてゐるのかと思はれるやうな、その癖相變らずごろごろと音を立ててゐるところの、とろんとした鉛色の海が見えた。

「つまらない所でせう?」と竝んで椽側に立つてゐる半田が言つた。

「いいえ」と私は昨日の今頃のこと、昨日の難儀な一日のことなどを考へて、心の底から相手に感謝

して言つた。

「これがずつと東京灣です、」と半田は海の方を指差して案内顔に言つた。「あの、向ふに尖かつて突き出たところがあるでせう、あそこが横須賀です。ここへは、東京のななしに、風の加減で、時々、あそここのドンが聞えて來ますよ。その左手に、煙でぼーつと空の黒くなつてゐるのがHです。ああ、さうでしたね、あなたの奥さんはHに居られるんですね。」

さう言はれると、斯うして不意に知らぬ土地の、慣れぬ家に来てゐて、心持が可成り感傷的になつてゐた私は、一瞬間、不思議にも、あの別れた、困り者の、ヒステリーのをんなのありし日の、可憐或ひは不憫な姿とその町の光景を思ひ浮かべた。——Hといふ、餘りよく知らない町の光景が抽象的に、即ち如何にも繁昌な町らしく、人や車や犬や何かが、自棄に廻した走馬燈のやうに見えるのだ。そしてそれ等のものが、總て忙がしく、慌しく、みな悉く個性なく見える中に、唯一人、私のヒステリーのをんなが、(彼女は骨細の、すらりとした姿をしていたが)惜しいことには肩の恰好が悪かつた、それから、歩く時に少し身體を浮かすやうにしてそれをひよいひよいと上下に揺するやうな歩き附きをしたものだが、今その恰好で、その走馬燈の背景の前を、右に行き又左に歩きしてさ迷うてゐる姿が、ありありと私の心の目に浮かぶのだ。私の未練な回想はつづいた。——彼女は顔立のいい女であつた。とり分け眉も美しく、鼻の恰好もすぐれてよく、又ヒステリーめいてはゐるが、澄ん

だ目の持主であつた。が、唯一つの缺點は、大きくなかつたが、上唇が少し上反り加減である上に少し厚ぼつたかつたことだ。ヒステリイが起ると、それが赤黒い血の氣を帯びて、そのひどい時には銀光を呈したものだつた。そしてきめは細かだつたが色は青味を帯てゐた。——ざつとさういふ顔付と恰好をした、そして目に涙をいっぱい溜めた、(彼女の涙の分量は異様に多かつた)しをしをとした女が、うろろろとその走馬燈めいたHの町を背景にして、言ひ換へると、走馬燈めいて人や馬や車没個性に右往左往する中を、彼女一人が悲しみや恨みや怒りなどの性情を多分に附與された生物らしく、右に左にさ迷うてゐるのだ。——半田と、遙かに見える海の果ての空に黒煙を吐いてゐるHの町を遠望しながら、椽側に並んで蹲んでゐる私の目に、生々とさういふ幻が見えたのであつた。すると、私もその幻の中の彼女のやうに目に一ぱい、多量の涙を感じたことだ。だが、もしそのさ迷ふ女が私のところへ歸つて来てくれたらやつぱり困る、と私は半田に隠して涙の目をふきながら、思ふのだつた。——

それから、私は津田沼で三日間暮した。その三日の間、私は半田夫妻の生活と性格とを略知ることが出来た。また、その三日の間、私は半田夫妻から可成り歓迎されたが、私自身はその三日の間にだんだん半田といふ人物に友達としての敬意を持てなくなつた。といふのは、彼がひどく頭の悪いこと、それはまだ我慢が出来たが、質の悪い誠つきらしいこと、彼の細君に對する態度に、同情出来

ないむら氣があること等だつた。一例を挙げると、變にお追従じみたことを言つてるかと思ふと、急に氣ちがひめいた態度になつて高飛車に出たりする様子、神經質とか氣むづかしいといふのなら私にも分るが、それ等がいかにも策略めいた氣むらであるところが、彼の容貌の口附が氣になるやうに私の胸に落ちないことだらけなのだ。といつて、彼がある意味で善人であることは間違ひなかつた、だから、可成り困つた人物ともいへるのだ。が、彼のことは後で述べる機會があるから、彼の細君に就いて語らう。彼の細君は、彼女の言ふところに依ると、當時二十二歳、四録の酉歳だといふことだが、一歳ぐらゐ若く言つてゐるかも知れない、といふのは、その一つ年上の、申の五黄である私のをんなと同じ年かも知れないと思ふ程、彼女と私のをんなの性質にどこか共通してゐるところがあるからだ。その一例——一國な正直者ではあるらしいが、初めて私が會つた時彼女自身が言つたやうに、夫の歸りが十二時が一時になつても飯を食はずに待つてゐるといふのは、そんな事が稀にあるといふだけで、私が三日間に見た彼女はぢやぢや馬のやうな性質を持つてゐるやうにさへ見えた。例へば、ちよつとした事で、夫婦喧嘩を始めると、(それは大抵鶏の喧嘩ほどの時間ですむのだが、)彼女が忽ちイイ、イイ、イイとその黒い顔の、小さい口を尖らして、白い、大きな齒をむいて夫の半田に(本當に)噛みついてかかるところなぞ、私の別れたをんなの年の申歳の性質に近いものだつた。——ざつとそんな風な、兩方とも餘り尊敬の拂へぬ人物であつたから、外に私を入れる葉があつたら、私は

大方三日が二日も泊つてゐられなかつたに違ひない。しかし、さうはいふものと、私はこの家にゐて退屈はしなかつた。――

さて、なる程、いつか彼の細君が言つた通り、半田は暇さへあると裸足になつて庭を掃いたり、尻はしよりをして椽側を拭いたり、家の内外の掃除をばかりしてゐた。私はいち何するといふことなしに、椽側に出て掃除してゐる彼と話したり、茶の間で女の用事をしてゐる彼の細君と話したりして日を暮した。夜になると、初めの晩のやうに、私たちは隣同志の部屋で寝たものだが、床に着くと二分間も経たないうちに、半田が大きな鼻をかいて寝てしまふものだから、さう急には寝つかれなかつた彼女と私とは、いつも唐紙越しに、どちらも明りを消した眞暗な部屋の寝床に横たはりながら、彼女が全く話好きで女性と見えた、長い間、時とすると、三時間も色んな話をしたものだ。彼女は藝者をしてゐた時分の自分の話、自分と半田との話、朋輩の藝者の話、それから三味線唄や芝居の話などまで持出した。私は又それに應じて、それぞれの自分の見聞を話したのだが、結局一夜のうちの話の半分以上は、彼女が尋ねるままに、例の私のをんなのヒステリーの話に落ちたものだ。それをまた彼女は、初めての時よりも一層、次第に露骨に、興味を感じるやうな口振りで私から話を引出すやうに見えた、私も亦、一番手近の、最近の自分の身に泌みた苦勞のことであるから、易々と存分に喋つた。ところが、少しづつ僅三日の間の私の見聞に過ぎないのだが、彼女がその私の話のヒステリー

を模倣するやうな言行を夫の半田に對して現はして行くのを私は發見した。ヒステリーが恐ろしい傳染病であることは、その後私は屢々私の目で見て來たことだが、恐らくこれがその初めの發見だつた。……

さうして三日目の夕方近くのことだつた。私とその家に来てからその家にとつての初めての郵便物だつたところの、一枚の葉書が配達された。それを見てゐた半田の顔が俄に不斷の青さを一層増して、硬張つて行くやうに見えた。そこで「おいおい」と言つて呼ばれた彼の細君も、それに一應目を通すと、忽ち狼狽した様子を現はし出した。それに驚かされて、「何か變つたことが起つたんですか？ どうしたんですか？」と私が聞くと、彼等は餘りの驚きの爲に私の言葉が聞えぬらしく、「いやあ、もう間もなくですわね？」とか、「俺は納屋の方を掃除するから、お前は内の中をすつかり雑巾掛けてくれ」とか、「今日は又生憎ひどい風でしたから、砂利で大變でせう」とか言ふ慌しい問答があつた後、漸く半田が私に向つて、「親父が今日の夕方やつて來るんです、葉書が來たんです。掃除の喧ましい親父でね」と言つて中腰になつておろしてゐる様子は、何か非常に恐ろしい者が來る、それは親父などではない、手取り早く言ふと盜坊の家に巡查が踏込んで來るといふ注進を得たやうな調子なのだ。私はどんなに、恐い親父か知らないが、彼が來るといふことが、そんなに彼等の恐怖を呼起すのを見て、私のやうな者が、私のやうな甚だ道徳家に遠い性質の者が、これは非常に

正しくない人たちに違ひないといふ氣がして、氣ばかりでなく、文字通り心が痛くなるのを覺えたものだった。それは私に歸る巢があつたなら、歸る巢がなくても、昔の土流の「濁しても盗泉の水を飲まず」といふやうな氣概があつたら、早速この門に唾して去りたいと思つた程、これは屹度大變正しくない人たちに違ひないと思はせたことであつた。

だが、私が去る迄もなく、「君、濟まないが」と、半田は私に言つた。「あの、親父がもう一二時間中にやつて來ますので、君濟まないが、一遍歸つてくれませんか、親父が歸つたら直に知らしませから」といふのだつた。「ああ、さうしませう」と私は、顔だけは強ひてあわてた表情を現さないように心掛けて、言つた。

「今すぐがいいでせうね?」「ええ、さうしてくれればいいですが、……親父が歸つたら。すぐ知らしめますから」と彼は尻はしよりしながら、言つて、納屋の掃除に向はうとして、「二三歩行きかけたが、又引返して來て、「すぐ知らしめますけど、どこに君はゐます?」と聞いた。私は一寸返事に窮したが、早速氣がついて本郷の木戸參三の名前と彼の下宿の所を言つて、「そこにゐますから、木戸參三氣附として下さい」と答へた。「さう、何々館、木戸參三何々館、木戸參三、何々館……」とくり返しながら半田は再び納屋の掃除に向ふために、土間を下りかかつたが、その癖すぐ忘れてしまつたと見えて、「木戸何でしたつかけかね?」と聞き返すので、「參三」と私が答へると、又「ああ、參三さ

ん」と鸚鵡返しに言ひながら、「參三とはどう書くんです?」と今度は下駄を穿きながら言つたが、急に引返して來て、机の引出しから紙と鉛筆とを取出して、私に書いておいてくれと言つた。

私は言はれた通りにして、荷物も何もないのだから、さて別れて歸つて行かうとしたが、ふと汽車賃が足りないのに氣がついたので、半田の後を納屋に追つて、躊躇しながら半田にその事を打明けて東京へ行つてからの電車賃と、合はして二十錢あれば足りるから、頼むと、さう、と言つて彼は心よく内の方に引返して行つた。で、私が又彼の後を追つて行くと、彼は忍ぶやうに茶籠の引出しを開けて、藝口をだらう、ごそごそ探してゐたが、そこへひよつこ奥の間から手拭を頭から被つて、片手に箒を引つ下げた細君が現れて、「あなた、何を探してるの?」と詰るやうに聞いた。すると、彼は一瞬間はツと驚いた表情をしたが、「うむ? なアに、住友君が汽車賃に細かいものがないといふから……」と言つて、土間に立つてゐる私の方に向つて、「二十錢でいいんですか、ええ? 二十錢で?」と聲をかけた、私は服の下に冷汗を感じながら、「ええ」とかすれた聲で答へた。すると、「財布は私が持つてゐます」と言つて、彼女は帯の間から黄色い木綿の萎れた、恐らく幾らも入つてゐなさうな財布の中から、十錢銀貨一枚と五錢白銅二枚出してくれた。けちな奴だな」とそこで半田が、もう先の恐る恐るの態度をがらりと變へて、「五十錢銀貨があるだらう、それをお出し」と叫んだ。「いや二十錢でいいんです」と私は顔を赤くして、一層かすれた聲で叫んだ。「さう」と細



君は別に機嫌を悪くせず、白い、大きな歯を一寸笑はせて、「二十銭つてあなたが言ふもんだから……」と言つた。「二十銭と言つたつて正直に二十銭出す奴があるもんか、」と半田も機嫌を直して、「それとも、十圓札をくづして上げるか、くづせないだらう？」と言つた。私は更に顔が火になつたやうな気がした、たらたらと腋の下を蟲が這ふやうに冷たい汗が流れた。だが、半田は平気でさう言ひ残して、彼女の手から受取つた一枚の五十銭銀貨を私の手に渡すと、そこそこに私の傍を走り抜けて、納屋の掃除に向つた。

「大變お世話になりました、」と私は細君に向つて丁寧にお辭儀をすると、彼女は手拭を被つたまま頭を下げ返して、「お氣の毒ですね、だけとお父さんはいつでも一晩で歸るんですから、でも念のためこちらから葉書でお知らせしますから、もしたら又来て下さいね、」と持前のぶつきら棒な調子の言葉で言つた。「本當にお父さんが来るといふと、命が縮まるやうな思ひをしますよ、私、大嫌ひだわ、ああ、やだ、やだ。ぢやあ、さよなら。」と私は返して、それから納屋の前に行つて、入口から薄暗い中に首を突つ込んで、「いろいろ有難う、ぢやあ、さやうなら、」と半田らしい鼻をすする音をさせながら、頻りに掃除をしてゐる黒い影に挨拶した。「さう、ぢやあ、葉書を出したら來給へな、」と中からの答だ。「さよなら。」

そして、豫め教へられた道に依つて、街道には出ないで、砂利で下駄の埋まるやうな畑道を突き

抜けて、此間の大きな練兵場に出たものだ。此間のやうに、やつぱり四方が紅敷を振り撒いたやうな眞赤な景色の中に、行手の遠くの方には先を削いだピラミット見たいな形に、赤い中に黒く、小さく例の火薬庫も見えるのだ。風の強い日で、背中の海の方から吹いて来るが、殴るやうに後から私のよれよれの哀れな紡績の羽織を、襦袢の一つ手前の銘仙の着物の袖を吹きまくるのだ。やけな調子で吹く私の口笛も一向やえて響かぬのだ。

そして津田沼から東京へ向つて走る汽車の中で、私は三日前にその反對に走つた時とは、又別の心細さに襲はれたことであつた。前の時には、行先の心細さの中に、漠然とした希望があつたが、今度の場合は行先ははつきりしてゐるが、そこに行つたとして何の望みがあるどころか、當の主人の木戸參三が、いくら寛大な下宿とは言ひながら、六ヶ月分も拂ひを滞らして安閑といつものやうに坐つてゐるかどうか？ 彼が坐つてゐようとしたとして、下宿の方で彼を追出しはしなかつたか？ よし又ゐたとしても、私を一日でも二日でもとても置いてはくれられないだらう、さう思ふと、その汽車が兩國驛に着くのが、着いて本郷の下宿に行くことが、死刑でも受けに行く程恐い氣がしたものだ。いつそのこと、この汽車が、夜になつても、又朝になつても、千年萬年走りつづけてゐてくれたらと、私は願ひさへした程だつた。

ところが、それから夜になつた東京の町にはひつて、私が忍ぶやうに彼の下宿の支關に立つて、恐

る恐る、そこに出て来た猪首の、ちんちくりんの女中にさへ馬鹿丁寧に平身低頭して、「木戸君は？」と聞くと、「あつしやいます」といふ聲に取敢ず力を得て、それから狐狸の佳家めいた、荒れた、汚い廊下をこそそと、吉凶如何に？と恰も戀人の部屋にでも行くやうに、胸を震はせながら、彼の部屋を尋ねると、いつも同じ顔をしてゐる男だが、その時は受取る感じに於いて、どこかゆつたりと私を安心させた態度で、「やあ、」と彼は叫んだ。見ると、彼の小さな、菊版の本の二冊以上も並ばないやうな、一閑張りの机の横に、それと同じ位の、これは又、ばかに大きな玩具の張子の犬が置いてあるのだ。小さな彼の身體と張子の犬とは、その大きさ何れぞ？と言はんばかりに、犬が堂々と目を見張つてゐるので、「どうしたんだ、その犬は？」と私は何よりも先に、坐りながら聞くと、「買つて来たんだよ。」と持前の表情の鈍い顔で、彼は何気なさうに答へるのだ。「うまく都合がついたかい？」と私は我が事のやうに、多少我が事に關係もあるのだから、勢込んで聞くと、

「ああ、」と彼はやつぱりぼつねんとした調子で答へた。「その代りもう君に約束した翻譯原稿はやれないよ。」

「原稿？ 賣れたのかい、みんな賣れたのかい？」と私は聞いた。

「賣れたといふ譯でもないんだが、」と彼は一寸にやにやして言ふのだ。「兎に角、あの原稿がすつか

りなくなつたんだよ。」

「一體どうしたんだ？」

「××社にあれをすつかり擔ぎ込んだんだよ、そしてね、斯ういふ談判だ。あれを抵當に金を貸してくれ、その代り一ヶ月以内にあのどれかに適當な、名前のある譯者の名を借りて来る、でなければ、あの原稿を全部煮ようと焼かうと××社の自由に、といふ不思議な談判なんだ。」

「それでもまあよかつたね、兎に角、」と私は言つた。「それでいくら貸した？」

「百圓だ、」と彼は相變らず無表情に答へた。「が、その中から九十圓下宿に進呈したんだ……」

「その犬張子は幾らしたい、高かつたらう？」と私は聞いた。彼の吉報に、私自身も大きに愉快になつて、氣持に餘裕が出来たのに違ひなかつた。

「五圓だよ。」

「五圓！」と言つて、私は呆れて一寸黙つたが、忽ち胸の邊から咽喉元にかけて、泡でも湧き立つたやうな心持を感じて、「ハフフフフ、」と吹き出した。

「ウフフフフ、」と彼もその黒い、小さな顔に皺を寄せて笑つた。

それから私たちは打連れて、大さう機嫌よくカツフェに出かけた。そこで木戸は中スキイを三杯も飲んだものだ。私は随分長い付き合いだが、彼が酒を飲んだのを見たのは、その時が殆ど初めてと言

つてよかつた。彼は不慮の赤黒い顔を十二倍も赤くして、但し表情だけはいつもとちつとも變らない  
誠に變化のないもので、だが、元氣だけはひどくよく振舞つた。

「泊めてくれ給へね、今夜。」と私が何かの話の切れ目に言ふと、

「いいとも、いいとも」と彼は小さい首を前後に振つて言つた。「いいとも、いいとも、もう又當分  
大丈夫だからね。……ところで、君はちつとも飲まないぢやないか？ 一杯乾せよ。」

言ひ忘れたが、彼はその顔や形や性質に似ず、のどのいい男で、嘗て學校時代に試験の日と、丁度  
その頃習ひ始めたつた歌澤の稽古會の日とが衝突した時、前者を止めて後者に出席したといふ履歷を  
持つてゐる男で、もつとも三ヶ月後にはその師匠の數多の弟子の中で一番の秘藏弟子になつたといふ  
柄にない素質の所有者なのだ。だが、なかなか友達などのおだてに乗つて輕はずみにうたつて聞かす  
といふ性質ではなかつたので、私は彼の唄といふものを一度も聞いたことがなかつた、そしてその時  
が初めてであつた。彼は三杯目のキスキイの杯を空けて、それをがちやんと音させて卓子の上に置  
くと、丁度あたりに人がゐなかつたが、突然その眞赤な顔を空中に向けて、

「うき草や、今日は向うの岸に咲く、ながれ次第や風次第、さりながら、誘ふ水にもこりもせず、  
とうたつた。そしてつづいて「さあ教へてやらう」と彼は酔拂ひらしく目を細くして叫んだ。「つい  
て唄へよ、——うき草や……」

そして「うき草や……」と私もうたつたことだ。

「さうぢやない」と彼は私の間違つた節を聞きとがめては、「うき草や……だよ、さあー」

「ながーアアれ……か？」と私。

「よし、しだアーいーや……」と言つた風に彼はつづけたものだ。

果は、私たちは十二時過に俥に運ばれて、彼の基督教徒の下宿屋に歸つて行つたが、歸ると、急  
一變した氣分に襲はれたもので、互に變に黙り込んでしまつて、互に妙に不機嫌を感じた、そして唯  
一言、「今夜はもう遅いから蒲團を借りる譯には行かない、共同の蒲團だよ」と彼が言つたのに、「結  
構だよ」と私が答へたきりだ。そしてそのまま二人は背中合はせに身體を固くして寢てしまつた、

翌朝、私たちはどんなに愴氣たことか？ それは神様に聞いてくれ給へ。もつとも、私は老人のやう  
に早く目が醒めて、一度醒めると一度起きなければならぬ性分だし、彼は十二時の例の半鐘に  
起きるのを習慣としてゐる者だから、彼が起きる迄に、私は一度起きて顔を洗つて、一時間程雜誌を  
讀んで、又寢て、そして三度目の目を醒ましたものだ。ガン、ガン、ガンといふ例の玄關の半  
鐘の音に私が目を醒ますと、ウー、ウー、ウーと言つて彼は伸をしたことであつた。無論二人とも  
昨夜のことなど、頭の中には生々として何よりも先に思ひ出してゐるのだが、一言も齒から先には洩らさ  
ないで、丁度別々に見た夢のやうに、黙つて別々に味つたものだ。夢といへば昨夜のことは餘りにも

前後の事情とは關係のないことなので、本當に夢のやうな氣もふとするのだが、證據は、枕元の寶物大以上の張子の犬が、木戸に昨日金が這入つてそして昨夜カツフェに二人で行つたのは嘘ぢやないと語るのだつた。

さて、その日が過ぎてその又翌日の、午の半鐘が鳴つて間もなくのことだつた、猪首の女中の案内で、津田沼の半田が木戸の下宿に私を尋ねて突然やつて來た。彼は何が這入つてゐるのだから、持つて來た大きな風呂敷包を入口の障子の際に置くと、私に一寸挨拶してから、「あの木戸さんですか、私は半田六郎といふもので……どうか宜しく」と例に依つてなかなか物馴れたらしい初對面の挨拶をしたものだ、そんな事には極く馴れない木戸は大きに面喰つたものだ。それに、木戸といふ人物は物言はずな上に全然人に調子を合はすなぞといふことの出來ない質だし、半田は何方かと言ふとがさつな、いい加減でも何でもいいから、胸襟を開いた恰好なぞをしたがる風だつたから、どうも二人の附合がはかばかしく行かないやうに見えた。で、一時間もすると、半田は困つて來たものと見えて、「住友君」と私に合圖するやうな口吻で、「その邊に散歩しませんか、そしてどうです、又内の方へ來ませんか？」と言つた。あんなに先日大騒動したのに拘らず、彼の父親は急用が出來たとかで來なかつたのださうだ。そして彼は申譯のやうに、「どうです。木戸さんも？」と言つたが、無論木戸は「いや、僕はどうも……」といふやうな言葉で斷つた。

で、私は半田について出たところが、彼は半町ばかり歩いたところで、稍々聲をひそめて、私に行きつけの質屋があるか、これを、と言つて、例の大きな風呂敷包を一寸揺すつて、これを置きたいんだが、頼まれてくれないか、といふのだ。私は何といふ譯なく、普通の友達になら滅多に言はないことなのだが、そんなことをして、細君も承知してるのか、といふやうなことを聞いたところが、「いいんですよ」と相手は言下に答へた。その答へ方が随分不自然で變だつたが、まあ、いいわいと思つて、言はれるままに、幾何でも貸せるだけといふことで、彼を質屋の外に待たしておいて、私は中にはいつて風呂敷を開くと、半田自身のらしい米疏の袷羽織と綿入着物と、彼の細君のらしいお召の袷羽織とがはひつてゐた。當時の相場場で、二十五圓といふのを私は二十八圓にせり上げて、待つてゐた半田のところへ歸つて來て金を渡すと、彼はそれを受取つてから、又半町ほど歩いたところで、「あの」と少し言ひにくさうに、「僕んとこの奴、あんな正直者の疝癢持でせう。だから、今日のことは言はないで下さいね」と言ふので、私ははつと思つて、だから、先程念を押したのに、とむツとしたが、それも堪えて、「ええ」と答へた。すると、半田は大きに勢を得た様子で、「これから一杯飲みに行かうぢやありませんか？」と忽ち愉快極まる顔をして、足を早めたものだ。私はその横顔を、その飛び出た目付、氣になる口附をちらと見て、腹の中で、無論、この位のこととは誰もすることだし、外の友達の場合なら餘り氣にならないのだが、この善良には違ひないが、愚かな、あ

あ、世に愚か程悪いものはない！ 愚かな人を氣を付けよ、ああ、厭だ、厭だ！ そして私自身のことを考へて、世界の隅々に遍在する神様！ 私に菓を與へ給へ、と祈りながら、彼について行つたことだ。

すると、又私といふ人間はどうしたことだ！ 半田が五六町來た邊の、薄汚い料理屋に威勢よく上つたのに従つて、座敷に通つてから、私はふと思ひついたやうに、この横町に私の親類がある、その五分間ばかりで濟む用を思ひ出したから、と斷つて、表に出て、たとひもう三日でも東京にゐよう、あの木戸の無言の行をするやうな部屋でもいいから、あそこに行かう、それには……と考へて先に行つた私の馴染の質屋の暖簾をくぐつたものなのだ。そしてどうしたかといふと、小僧を捉へて、執固く談判をしたものだ、といふのは、今し方持つて行つた半田の質物を、無論彼に内所で、十三圓に値上げさせて、金五圓の差を受取つて、今度金が出来た時そつと返しておけばいい、なぞと虫のいいことを考へたものだ。そして着服した五圓の札を潰れるやうに握りながら半田も行つた時、その半田を行くのに十分以上かかつて考へ考へ歩いたものだ。そして又ふらふらと質屋に引返して行つて、其間のおどりの利息を貰はねば、といふ小僧に泣くやうに頼んで、今借りた五圓を返して元通り二十八圓に直しておいて、しをしをと半田の待つてゐる料理屋に歸つて行つた。……

そして、その晩、酔拂つた半田と一緒に、再び津田沼の驛を下りた時、半田はまだすつかり酔が醒

め切らないからと言つて、驛からの歸り途の、例の大きな大きな練兵場のまん中で、酒が醒める迄と言つて、ごろりとその草原の上に大の字になつて三十分以上寝そべつたものだ。私はその間、秋の夜の寒さに震へながらしつかりと兩腕を、それで自分の身體に抱きつくやうに、組合はして、彼の續手に同じく寝そべりながら、常に空にはある筈だが、あんまり泌々見たことのない天の星を、これは何と澤山あることだらう、と感心して見たものだ。やがて、半田はふらふらと立上つて、私の鼻の先に、ハアと彼の息を吹きかけて、もう確に酒の臭がしないと確かめると、また私の先に立つて、海の音のする彼の内の方に歩き出した、月が出ないので、まだ道は暗いのだ。

苦  
の  
世  
界  
その四

考へて見ると、半田六郎といふ男はをかした人物であつた。初めて彼は私に會つた時、私を彼の住んでゐる村の役場のの助役に世話しようと言つておきながら、その後私が屢々なけなしの錢を奮發して、わざわざ津田沼三界の彼の家に足を運んだことだのに、一向その話を進めてくれないのだ。不思議なことに、彼には意地の悪い様ところも、相對してゐて氣のつまるやうなところも、要するに附合ひにくいところなどは少しもなかつたばかりか、一概に言ふと十分好人物で東京から三日五日と斷片的に居候になりに行く私を、先づ下にも置かない待遇であしらつてくれるのだ。それにも拘らず私はそこに二日三日とみると、直に東京へ歸りたくなるのだつた。

東京に歸ると言つたつて、彼自身がいつ何時そこから退去を命じられるかも知れないところの、本郷の木戸參三のくすぼつた部屋に轉がり込む外はないのだが、それに參三は六郎と違つて、極めて愛想のよくない男で、私が話しかける外には私が話しかけなければ、三時間だつて五時間だつて黙りこ

## 一人の身の上 その一

寢床の中から首を出して友達の朝飯を盗むこと  
拾つた帯を身に締め自分の帯を入質すること

くつてゐるやうな人物なのだ。そしてそこに轉がり込んでゐる一日は食べる物さへ腹に一ぱいとは行かぬのだつた。と言ふのは、朝、晝、晩、と私が彼の下宿で三度も飯を食ふと、一膳三十三錢とする、九十九錢の負擔を彼にかけると、だから、私は無理にも朝飯の時間を飛ばすために、寝て暮さなければならなかつた、でなければ、參三にさうさせて、私が寢床の中から首を出して、彼の朝飯を盗むのだ、そして、晝飯だけはやつと彼とさし向ひで、だが黙々として食ふのだが、さて夕飯がなかなかの難關なのだ。時とすると、參三は、猪首の、ちんちくりんの女中が彼の夕飯の膳を運んで来たのを見定めておいて、「君」と私に、「これを食ひ給へ、僕はこれから外に出るから……」と言つて、どこか友達の家で御馳走になるつもりでだらう、出かけて行くこともあるが、大抵の日、出不精な彼は机の前に坐つたまま動かないので、私の方がさうして坐を外さなければならなかつた、私だつてさうさう訪問して行く友達の見當が付かないのだ、すると參三と相談して、辛うじて十二錢の錢をこしらへて、近所のおでん屋に、飯二杯と豆腐二箇にがんもどき一箇との夕飯を食ひに行くのだつた。そんな苦しい思ひをする東京の、木戸參三の内なのだが、三度の食事ぐらゐには何の心配もない六郎の内には二三日あると、私は直にそこに歸りたくなるのだ、歸つても、そこには、ゐたくても二三日以上はゐつづけられないと知りながら、やつぱり歸りたくなるのだつた。「君、僕見たいな者だつて。」と私は屢々彼に聞いて見た、一何か仕事見たいなものがないだらうか？

「僕にもないんだよ。」と彼はぼかんとした顔を頬べたに依つて腕で支へて、机に向う向きに坐つたまままで答へるのだ。「だが、君は津田沼の村役場の助役になるんぢやないか？」

「ところが、僕はもう何だか厭になつて來たんだよ……」

「贅澤言ふなよ。」

なる程、贅澤言つちやあいいけないわい、と思つて、私は又愈々しつかりした話を極めに、津田沼に向ふのだつた。現に、その前の晩だつたか、夜遅く、汽車賃を拂つたら無一文になつた袂を振りながら、私は兩國で汽車を乗り捨てて、本郷追分で青い電車を下りて、それから參三の下宿までの一町半ばかりの道を、黙つてゐたら益々世界が心細くなるので、彼に教はつた「浮草や、今日は向うの岸に咲く、流れ次第や風次第、さりながら、誘ふ水にも懲りもせず」とうたひながら暗い電車道の舗石の上を歩き歩き、この時ぼつりと頭の上の電線が切れて、その端が俺の身體に觸ると共に、あーッ、ぶる／＼／＼、とそれなりけりに死んでしまつたら、いつそのこと結構だと思つたかと言ふと、人間といふ生物め！ さうなつてもなかなか生きたがる生根のしぶといものと見えて、即座に車道を飛び越して人道に逃げ込んで、そこで又一端中絶した「浮草や……」の唄をつづけてやつてゐると、ふと路傍に一見して帯と見えるところの、長々とした太い紐やうのものが横たはつてゐるのを見出した。帯だらう、と思ひながらも、極端に蛇を恐れる私は、それを避けて、一間ばかり行き過ぎるうちに、



蛇ぢやない、帯だらう、帯らしいな、やつぱり帯だった、帯なら……？　と思つて、初めて歩みを緩めて、次にこのこの後戻りして、だんだんと及び腰の姿勢で近づいて見ると、間違ひなく帯だったの、恐は恐は端の方から手繰り寄せて拾ひ上げたものだ。拾ひ上げて一掴みにした帯の手觸りと重量から推察して、悲觀したことは、それがどうも綿入りの縮緬帯らしいのだ。が、私はもう躊躇なく、それを現に自分の腰に締めてゐる帯の上からくるくと巻きつけて、何喰はぬ顔で、但し大きに足を早めて、參三の下宿に向つたのであつた。道々、明日これを質屋に持つて行つて、そしたら一圓も貸してくれるだらう、それでやつと參三の力を借りずに津田沼の旅費が出来たわい、と圖々しくも考へたことだ。なアに、私だつて、深夜に、何處の誰か締めたとも分らない、綿入りの縮緬兵兒帯を着服するやうな了見を、何も親から生みつけられた譯ではないのである。現に、今も決して裕福な身分ではないが、一圓の金には先づ困らない現在の私に見ると、その帯を拾ひ上げて、路傍の竝木のリンデンの枝に、落とし主が探しに來たら分るよう、引掛けておく位の心得は十分持ち合はしてゐるのである。

さて、その翌日、行きつけの質屋を訪問して、友達よりも親しいその二番番頭の子之吉をつかまへて、「おい、この帯」と言つて、自分の腰に二重に巻きつけた奴を、一重だけくるくと解いて、彼の前にはふり出すと、型の如く彼はそれを検査してから、

「一圓だね」と豫期しただけの金高を答へた。「誰の帯だい、これは？　古いが、なかなか意氣な柄だね」「意氣な筈だよ」と私は答へたものだ。「俺たちの友達のものぢやないんだ。實は昨夜拾つたんだよ。」

「それぢやあ、住友さん」と子之吉は流石に氣味が悪くなつたのか、言ふには、

「これを君が締めて、その君の方のを預け給へ。」

「なる程、さうするべきものかなあ」と私は言つて、秋田の友達から貰つた敵織の、もう五六年も使用してゐたところの、私自身の、これも亦その當時屢々金一圓で遣り取りしてゐたやつを、それを入質したことであつた。そして私はその一圓を袂に入れて、そして津田沼の半田の内に、第何回目かの訪問をしたことであつた。

「やあ、住友君、よく來ましたね、今、君の噂をしてゐたとこなんだよ、さあ、お上り。」といつも變らず、半田六郎はなかなか調子のいい男に違ひなかつた。

廣い世間に、當時私をそんなにも愛想よく迎へてくれる内といふものは、彼の内の外になかつたことだから、私はいつの時でも、初めは、來てよかつたと思ひながら、いそいそと上るのだが、人を判断するの、最も確で、間違ひのないものはその第一の印象である、大抵の場合、二度三度と付き合いつてゐるうちには、それぞれ情實が出來て、どうかすると相手を無理に都合よく解釋しようとして、

飛んでもない間違ひを來たすことが往々あるが、初對面の時の感じをそのままに受け取つて、そのま  
 まに感じておきさへしたら、決して失敗しないものである、と賢さうなことを言ひはするものの、結  
 局は氣のいい人物であるところの私は、いつもその事を後になつて氣がつくのだ。先に私は半田と初  
 對面をした時の彼の顔から得た私の印象として、『全體の顔は決して恰好の悪いものではないのだが、  
 少し大振りな口元の、見る者に一寸氣になる程度にふくれてゐる鹽梅が、何と言つていいのか、やつ  
 ぱりその一寸氣になるやうな種類のもの、それが物を言ふ時に唇を含むところなぞ、益々氣になる  
 やうな種類のものなのだ。そしてアハハハ、と氣になる口を尖らして、大きく開いて笑ふ癖があつ  
 たが、すると、その唇がやつぱり氣になる程赤いのだ、』と述べたが、半田六郎の大體の人となり  
 はその顔にちやんと書いてあつた、といふことが、今に讀者諸君にも分るであらう。

さて、私が上に上つて、茶の間用と客間用とを兼ねて、その一方に若し小さい子供が陣取つたら、  
 その子の顔と手だけしか見えないに違ひない程の、大きな四角な火鉢の周圍に、六郎と彼のにきび顔  
 の細君とそして私とが、それを三方から圍む位置に坐つて、やつと落着いたかと思ふと、  
 「惜しいことをしました。」と六郎が忽ち私に口を切つた。「今し方、もう二時間にもなるかなあ？」  
 と一寸細君の方に向つて、直又私の顔を見て、「村長と助役とが來ましてね、此間のお話は如何でせ  
 ろう？」と言つてわざと、ねえ？」とこの時又一寸細君の顔を窺つて、「紋付の羽織に袴を着けて、

やつて來たんですよ。」

「何？ ええ？」とその時、ふと怪訝さうに、その黒い顔の額に、貧相な皺を寄せて、斯う言つて聞  
 きとがめる細君を、「お前、黙つてろよ！」と六郎は強壓的な言葉で囁ましておいて、直に私の方に  
 向き直つて、「だけど、君があんまり氣が向かなさうな様子だから、兎に角、一應斷つておきました  
 よ、村長も非常に残念さうにしてゐました。が、いいでせう、僕んとこにずつとゐてもねえ、ねえ？」  
 そして多少今し方の言葉で頬をふくらしてゐた細君の方に、今度は又至極優しい調子で、下手から伺  
 ふやうに言つて、「ねえ、住友君ずつとゐるといいんだ、ねえ、ねえ？」

それで又私は、何もいい氣になつた譯ではないが、好きな東京に歸りたいと言つたとて、あの私と  
 五十歩百歩位の、貧乏な下宿住居の參三の外に行くところがない譯だから、そこはよくよくの際の取  
 つて置きとしておいて、そのまま又二日三日と六郎の内で暮した譯だが、彼の細君は私との初對面の  
 時に彼女自身が私に報告したやうに、外出した夫の歸りが十二時一時になつても、飯も食はずに待  
 つてゐる、と言つたのは、それは嘘ではないが、それが決して貞淑な了見からではなくて、腹が立つ餘  
 りの意地ツ張りからに外ならなかつたのだ。そこへ持つて來て、半田が茹々ならぬ嘘吐きと來てゐる  
 ので、例へば内を一步外に出ると、否、出る前からどこかで酒を飲んでやらうと計畫して、そしてそ  
 れを實行して置きながら、それを決して細君に知らせてないのはいいが、そのためにその間の行先に

就いてやら、その間に経過した時間に就いてやらをこまかす爲に、誠に謙を重ねなければならなかつた。それもいいが、困るのは、彼と行動を共にした私が彼の謙に調子を合せなければならぬことだ、前にも言つたやうに、この男は少々ならず頭の悪い人物なので、その吐く謙が屢々随分辻褃が合はなくなるのであつた。——そこで物に赤面する質の私は、幾度かはらして顔を赤めなければならなかつたか知れなかつた。だが、よくしたもので、彼女も亦並々ならず頭の悪い人物なので、大抵の場合、彼の謙に入分まではごまかされてしまつたのだつた、だが、それがうまく行かなかつた時は、忽ちドタンバタンと、彼等の間に遠慮のない組打と打合ひとが始まるのだ。

「やア、引掻きやがつたな、」「あんたが先に殴つたんぢやないか、あんたが先に！」ドタンバタン、ドタンバタン。「そんな恐い顔をするな！」「さういふ自分だつて、氣狂ひ馬が怒つたやうな顔をしてるぢやないか？」「ウツフツフフ、」「ええッ、くやしい！」「何だ、動物園の猿！」「フフフフ、」そして喧嘩が終るのだ。初めはどうなることか、と思つて「まあ、まあ、」なぞと遠くから迷惑しながら宥めてゐた私が、それが餘り呆氣なく、犬等よりも簡単に濟んでしまふので、もつと何方かが根強くやればいいのに、と後になると物足りない氣がする程、それ程一瞬のうちにそれは濟んでしまふのが常なのであつた。

或夕方、半田が「住友君、君は長田幹彦といふ人を知つてますか、小説家の？」と私に言ふのだ。

「名前は何聞いてありますが、」と私は答へた。

「まだ會つたことはありません、君、御懇意なんですか？」

「ええ、よく知つてますよ、」と半田は大きな目をぎよろりとさして、例の氣になる口を前方に突き出して言つた。「舟橋の佐野屋といふとこにずつと泊つてゐるんです。面白い人ですよ、酒が好きでね、」と言ふと、その時彼の細君がいきなり傍から、腕白小僧のやうな目をくるくると光らして、

「まあ！ あんた、」と叫んで火鉢に翳してゐる半田の手を叩いた。「あんた、よく舟橋へ行くとお思つたら、そこへお酒を飲みに行くんですね私、長田幹彦といふ人大厭ひ！」

「長田幹彦さん、よく此處へ来るんですか？」と私は不思議に思つて聞いて見た。

「いいえ、」と細君は言つた、そして彼の方に向つて、「たつた一遍ね？」

「長田幹彦のそこへ行つて見ませうか？」と半田が私に言つた。

「さあ？」と私が生返事をしてゐると、

「行つて見ませうよ、」と彼は早その支度を始めた。

「あなた、」とにきびの細君が口を出した。

「長田さんのところへ行つたら、又遅くなるんでせう？」

「今日は早く歸つて来るよ、住友君が一緒なんだから……」

そして、もうぼつぼつと灯のつき始める頃だった、私は半田に従つて、海沿ひの一里の道を津田沼から舟橋へと向つた。道々、私が長田幹彦に就いて、半田に時々質問を發したところが、「感じのいい男ですよ」とか、「實にいいの、ですよ」とか、「酒を飲む時に、舌をびちやびちや鳴らす癖がある、それが實に感じがいいんですよ」とか、なかなか細かい話をするのだ。どうして知り合ひになつたのか、と聞くと、例の私とその内で彼と知り合ひになつたところの、佐山桃崖に紹介されたとのことだつた。

あたりが海の上だけを残してもうすつかり夜になつてしまつた。津田沼から舟橋へ通じてゐる海沿ひの單調な一本道を、いそいそと先を急ぐ半田の後から私は追ふやうに歩くのだ。

「舟橋へはまだ大分あるのですか」と私が聞くと、

「なアに、もうあそこに家が見えるでせう？ あそこがもう舟橋の入口ですよ。」と半田は答へて、それから何と思つたのか、急に眞面目な調子で、「住友君」と歩を緩めて、私と並行に歩きながら、彼が聞くには、「君は、その君の奥さんを世話した桂庵をよく知つてゐるんですか？」

「ええ、よく知つてゐますよ。」と何故か多少びくびくした調子で答へた。

「ぢやあ、」と半田は言ふのだ。「僕を近いうちにその桂庵に紹介してくれませんか？」

私は一寸當惑を感じたが、ここで曖昧なことを言ふと、何か悪い事でもしたのかと相手に思はれる

のが強腹なものだから、「ええ、いつでも……」と答へた。「だが、どうするんです、桂庵などに會つて？」と聞くと、

「僕んとこの奴をね、」と半田は薄暗い空氣の中で、その片つ方罫の入つた赤銅縁の眼鏡の奥に、その剽軽な目をぎよろりと光らせながら、すると彼の全體がばかに悪人らしく見えたので、私はぞつとしたが、彼はそんなことには頓着せずに話をつづけて言ふには、「彼女を又藝者にさせようと思ふですよ。」

「そんな事をしていいんですか？」と私。

「えええ、」と六郎、「彼女も近頃なりたがつてゐるんですよ。」

「だけど、それは又苦勞を増すやうなもんですよ。」と私。

「僕はもうつくづく夫婦生活なんてものは厭になりました。」と彼。

「君もですか？」と私は大きに膝を乗り出したといふ恰好で、思はず語調を強めて言つた。

「君の言ふ通りですよ。」と彼は例になく沁々した調子で言ふのだ。「世界中にいい女なんてものはありませんねえ？」

「だけど、」と私はこの半低能見たいな男にさへ、と思ふと哀れになつて、慰め顔に言つたことだ。「僕のから思ふと、君の奥さんなどは實にいい方ですよ。」

「さうでもないんですよ。」と彼は溜息まじりに言ふのだ。  
 そして私たちは舟橋の町に入つたところが、半田は又忽ち相手をくすぐつたく思はせるやうな、快活な調子に戻つて、

「住友君、幹彦の内に行く前に、そこらで一才飯を食はうぢやありませんか？」

「さうですか、」と私は答へて、さて二人でとある料理屋に上つて、その食卓の前に陣取ると、彼は水に放たれた龜さん見たいに、更に一層快活になつたものだ。その異常に快活な様子は、彼も亦男ヒステリイだな、と私に思はせるものであつた。

「君、この酒は實にうまいんですよ。」君は女優を買つたことがありますか？ 勿論、田舎廻りの女優ですがね、なかなか綺麗なのがありますよ。僕は一晩買つて、それが元で惚れられて困つたことがありますよ、それが女學校を卒業した女でね、そして墮落したんですね、だから、不斷無教育な田舎役者の中にまじつてゐるもんですから、僕等のやうな多少教育のある者に接するのが珍しいんですよ、今夜一つ呼んで見ませうか？ もつとも芝居が掛つてゐないと駄目ですがね、巡業してゐるものですからね。大いに今夜は飲みませうよ、なアに、今夜はかまひませんよ、歸らなくなつて。幹彦のところへ行つたら、いつでも遅くなるか、泊つて来るかするんですから、今夜は内に歸らなくてもいいんですよ。」

そして、その半田の言葉の通り、その晩私たちは彼の内に歸らなかつたのであるが、結局女優も呼ぶ運びに至らず、長田幹彦を訪問する間もなく、十二時近くまでその料理屋の薄汚い部屋に閉ぢ籠つたまま、彼がその大振りな口を魚のやうに開いて、げらげらと笑ひ且つ喋るのを、私は困りながら見物しただけに過ぎなかつた。

何かの時に、私たちの間に例の老朽文學者、佐山桃崖の話が出たことを私は覚えてゐるが、彼に就いて半田が言つたことに、「怪しからん奴ですよ、桃崖の奴は、今はもう止めたやうですがね、ついで此間まで何かの講義録を出してたでせう？ あれが儲かる儲かると言ふもんですから、それがもう二百圓かけたらとか、もう三百圓資本を入れたらとか、今度こそ、『最後の五分間』の大事な場合で、三百圓あつたら、五千圓の金が回収出来るとか、うまい事ばかり言ふもんだから、僕がお母さんに話して、その度毎に親父に内所で貸してやつたんですよ、すつかりで千百圓出しましたよ、それをすつかり先生猫ばばを極め込んでしまつて、しやあしやあしてゐるんですからね。それもいいんですよ、ところがそのやり方が憎いぢやありませんか、といふのは、或晩、やつぱりこの内で飲んだ時のことですがね、僕を酒に酔はしておいて、それ等の證文をすつかり巻上げやつたんですよ。それもまだいいんですよ、ところが、僕が今内にあるあの女とね、彼女が藝者をしてゐた時に、いつか話したでせう？ 墮落した後で、あの挑崖の奴、僕のお母さんの機嫌を取るつもりか何かで、僕がひどい、梅毒

にかかつて、それがもう三期で背中(せなか)の邊(へん)に一ぱい吹出物(ふきでもの)がしてゐるとか、何とか、出鱈目(でたらめ)を言つたんですよ。あの助平親爺(すけへいおやぢ)め！ あいつは仕様(しやう)のない助平(すけへい)ですよ、女房(にようばう)に双子(ふたご)を生ま(う)ました位(くらい)ですからね、いつかもこの内(うち)の、今はひつて來た女中(おんなぢゆう)ね、あの女中(おんなぢゆう)を取持(と)つてくれと僕(ぼく)に頼(たの)むんでせう、あんまり執固(しつこ)く言ふもんだから、僕(ぼく)三十圓(さんじゅうげん)奮發(ふんぱつ)してやつと彼女(かのじよ)を納得(なうとく)したんですよ。ところがあの親爺(おやぢ)のやり方(かた)があんまり厭(いや)らしいもんだから、結局(けつぎゆ)あの女中(おんなぢゆう)、金(かね)を取(と)つておきながら、彼(かれ)を振(ふ)つたんですよ。……」それから彼は、そんな事(こと)を話(はな)してゐるうちに、自分(じぶん)と自分(じぶん)で興奮(こうふん)して來たものと見(み)えて、葉書(はがき)を取(と)り寄(よ)せて、「梅毒三期(びんぞうさんき)」とか、「背中一ぱい吹出物(せなかに一ぱいふきでもの)」とか、「講義録成金(かうぎろくせいぎん)」とか、そんな文字(もじ)を並(なら)べて、佐山挑崖宛(さやまとうがいあて)の葉書(はがき)を認(た)めて、それを女中(おんなぢゆう)に出(だ)させたりした。

彼の罅(ひび)の入(はい)つた赤銅縁(せきどうえん)の眼鏡(めがね)を掛(か)けた、大きな、ぎよろりとした出目(でめ)、脣(くちびる)の眞赤(まっか)な、魚(う)のやうな恰好(かっこう)をした、腫(は)れた様(よう)な口(くち)、げらげらと鳴(な)る、笑(わ)ひ聲(こゑ)とよく似た音(ね)を發(は)つする言葉(ことば)、それ等を五時間(ごじかん)以上(いじょう)見聞(みき)きしてゐると、私は直(ただ)にも彼の傍(そば)を逃(に)げ出(だ)して、東京(とうきょう)の木戸參三(きどさんざん)の下宿(げしゆく)に逃(に)げて行(い)きたい氣(き)がしたものだ、當時(たうじ)、すつかり彼(かれ)を逃(に)げてしまつては、忽(たち)ち困(こま)る私の境涯(きやうがい)だつたものだから、私は堪(た)え堪(た)えて、ならぬ辛抱(しんぼう)をしたことであつた。昔(むかし)、平將門(たいらのかみかど)が事(こと)を企(くわ)てようとした時(とき)、依秀郷(よひひでさと)が一臂(ひとひで)の力(ちから)を貸(か)さうと申(ま)し出(で)ると、將門(まさかど)大き(おほ)きに喜(よろこ)んで、早速(さつそく)秀郷(ひでさと)を招(まね)いて共に晩餐(ばんさん)をしたことがあつたさうだ、その席上(せきじやう)に於(お)いてのことだが、將門(まさかど)は嬉(うれ)しさの餘(あま)り、徹頭徹尾(てつとうてつび)げらげら笑(わ)つて、いざ酒(さけ)が濟(す)ん

で飯(めし)を食(た)べに掛(か)つたところが、ぼろぼろ絶(た)えず飯(めし)を口(くち)からこぼしたと言(い)ふことだ、それを見(み)て秀郷(ひでさと)は愛想(あいさう)を盡(つ)かして、これは到底(たいてい)共に事(こと)を謀(はか)るの人物(じんぶつ)ではないと見破(みやぶ)つて、その日限(ひかぎ)り將門(まさかど)を見捨(みす)てたと言(い)ふ話(はなし)があるが、私(わたし)と彼(かれ)の場合(ばあひ)は、何も事(こと)を起(おこ)す譯(わけ)ではないが、私(わたし)も大き(おほ)きに彼(かれ)に愛想(あいさう)を盡(つ)かして、早速(さつそく)にも彼(かれ)を見捨(みす)てたい氣(き)がしたことだが、心の全(すべ)く正(ただ)しくない私は、明日(あす)の日の自分(じぶん)の身(み)の置(お)き所(ところ)なくな(な)る事(こと)を考(かん)へて、さうもならず(ならず)に附合(つきあ)つたところが、酩酊(めいてい)した六郎(ろくぢ)は彼の意(い)のままに私(わたし)を従(したが)へてその晩(ばん)それから、犬小屋(いぬごや)よりも汚(きた)い、舟橋(ふねはし)の、とある宿場女郎屋(しゆくぢやうぢや)に連(つ)れて行(い)つたものだ。

私(わたし)に出(で)て來(き)た、その時(とき)の宿場女郎(しゆくぢやうぢや)は、髪(かみ)の毛(け)の薄(うす)い、繪(え)にも描(か)けないやうなおでこで、それで色(いろ)が眞青(まゐ)で、鼻(はな)から下(した)を、誰(たれ)かが暴(は)り力(ちから)で引伸(ひきの)ばしたやうな顔(かほ)をした女(おんな)だつたが、南無三寶(なむさんぼう)！ その女(おんな)が私(わたし)が變(か)に悄氣(せうき)してゐるのを哀(あは)れに思(おも)つたものか、大(だい)さう慰(なぐさ)めてくれた迄(まで)はよかつたが、二人(ふたり)切(き)りになる

と、彼女(かのじよ)は私(わたし)の、私(わたし)の餘(あま)り體裁(ていさい)のよくない、にきび顔(かほ)をべろりべろりと嘗(な)めるのだ。私(わたし)は部屋(へや)の外(そと)に飛(と)び出(だ)して、六郎(ろくぢ)に救(すく)ひを求(もと)めて、どうぞ今夜(こんや)は歸(かへ)らうと頼(たの)んだが、酩酊(めいてい)した彼は殆(たいてい)ど私(わたし)の言葉(ことば)に耳(みみ)を貸(か)さないのだ。そこで私(わたし)は一人(ひとり)で歸(かへ)ることもならず、再び部屋(へや)に歸(かへ)つて、私(わたし)の助平女郎(すけへいぢやうぢや)に頼(たの)んで、頭(かぶ)の尖(さき)から足(あし)の尖(さき)まで、臭(くさ)い臭(くさ)い蒲團(ふとん)に糞(くそ)のやうにくるまつて、口(くち)の中(なか)で、助(すけ)け給(たま)へ、助(すけ)け給(たま)へ、と祈(いの)りながら寝(ね)たことだ。何(なに)を助(すけ)け給(たま)へ、と祈(いの)るのだ？ 迷(まよ)へる人間(にんげん)ともをか？ 何(なに)は兎(と)もあれ、今(いま)だつて、私(わたし)はその晩(ばん)の氣味(きみ)の悪(わる)さを、昨夜(おとすべ)のことのやうに思(おも)ひ出(だ)すことが出(で)來(き)るのである。……

## 二人の身の上 その二

再び「公園旋業、勳八等」の門を二人でくぐることに  
ラッパ節を弾き且つ歌ふ身持ち女がづらかること

それから、一週間程後のことだつたが、本當に六郎の細君は、いつか六郎の言つたやうに、又藝者に出たいといふ望みを持出したことで、或日、その日こそ彼は彼女に諷をつく必要を見出さなかつた。明らかに行先を彼女に告げて、私が彼を案内して、私たちはHの桂庵、里見の家へ出かけたのであつた、それも私は初めはどうしても行くのが厭だと言ひ張つたのであるが。

六郎、「どうして、僕がこんなに頼んでるのに、君は行つてくれないのです、何か譯があるんですか？」

私、「いいえ、別に譯と言つて……」

六郎、「ぢやあ、僕の、そして彼女の頼みだから、紹介してくれ給へな。」

私、「だけど……」

六郎、「ぢやあ、やつぱり何か譯が……？」

私、「いや、譯なんて、別に……」

六郎、「ぢやあ、頼むから。」

私、「しかし、それだけは……」

六郎、「住友君、何にも隠すことはないぢやありませんか、僕たちに？ ねえ、君、何か事情があるんでせう、話して御覽なさい、僕に出来ることなら、又相談にも乗らうぢやありませんか？」

そこで私は、到頭負けて、私のをんなが今度再び藝者になるに就いて、出る前に以前の藝者屋とのいきさつを解決する筈だつたところが、その前に知れてしまつて、そこで髯の三百代言などが仲に入つて、里見とは直接の關係はないが、以前世話になつた吉岡といふ桂庵と私とで五十圓づつ前の藝者屋に罰金を拂ふことになつて、吉岡だけは拂つたが、私は拂へないで逃げたことを六郎に報告した。

「そんなこと、別に里見といふ桂庵には何の關係もないことぢやありませんか？」と六郎に言はれて見ると、なる程さうに違ひないので、ぢやあ、かまはないのかな、と一瞬間私自身も迷つたが、さうだ、さうだ、これは六郎のやうな淺墓な人間にうっかり打明けると、どんな誤解をされるかも知れないから、決して打明けられないことだが、今度彼女が藝者になるに就いての證人の判の一件だ、それを私は桂庵の里見に捺さして置きながら、私自身は逃げてゐるのだつた、だから、やつぱり私は彼に會つては具合が悪いのだ、と思ひ返したのであつた。そこで、それから私は随分里見の内へ行くことを拒んだが、結局それも負けて、津田沼から汽車に乗つて、東京から電車に乗つて、そしてHの里

見の内を尋ねたのであつた。

「僅二三度見ただけのものではあるが、私には極めて印象深いところの、『公周旋業、勳八等、里見政之助』と記した看板の掛つてゐる、とある路地の奥の、小さい門構の内の入口に來た時、私の胸はどきどきと震へたことだ。けれども連れの六郎は何の容赦もなく、つかつかと格子戸の前に足音を立てて進むので、私も躊躇することもならず、思ひ切つてチリチリと鳴る格子戸を開くと、内の中は思ひの外ひっそりしてゐる様子で、『どなた?』と言つて、氣の抜けたやうな顔をして現はれた番頭の安藤の態度から、私は、いい鹽梅に主人の里見は留守だな、と察した。

「まあ、暫くですわね、どうぞお上り、誰もいませんから、さあ、」と安藤は愛想よく言つた。

「里見さんはお留守ですか?」と私はもう分つてゐるのに、斯う聞いて見て、一方大きに心を安めたが、それでは又半田の用が足りないことを思つて、どうせ會はなければならぬものなら、今更に來た方がよかつたのにも思ひながら、「今日はお客様を連れて來たんですよ、」と言つて、六郎の方に向ひ、「半田君、兎に角、失敬して上りませう、」と言つて、半田と共に玄關の間兼待合室兼客間になつてゐるところに上りながら、「僕の友達達の半田君といふ人ですが、この人が今度又あなたの方に世話を願ひたいことがあるといふので……いや、これは、私の見たいにお手敷をかけることはありませんから、どうぞ御安心下さい、」なぞと、一寸話に餘裕を持たして言つたものだ。

「それはようこそ……。さあ、どうぞ火鉢の傍に、」と番頭の安藤は、この男はこの時まだ二十三歳だといふのに、目尻の下つてゐる様子から、五分刈にした縮れ毛の顔の恰好から、小さい鼻の癖に鼻の大きな具合から、十分三十歳以上に見える態度で、座蒲團を新來の私たちにすすめながら、「この人も、」と願でその火鉢の傍に前から黙つて坐つてゐた二十歳あまりの、銀杏返しに髪を結つた女を差して、「この人もお客様なんですわ、遠慮のいらぬ人ですから、さあ、皆さん、ずつと火鉢の傍に寄つて下さい、」と餘り感じのよくない愛想笑ひを浮かべながら、喋べつたものだ。

半田は直に彼獨得の、譯なく人に押れる性質を持つて、自分の目的して來た用事などは夙に忘れてしまつたやうな風で、私と番頭の安藤が差向ひに坐つてゐたので、彼の向ひに坐つてゐる、例の田舎の酌婦らしい恰好の、壁のやうな平面の鼻のまん丸い、その癖眉だけは畫いたやうな三日月形をした女を、ちろちろと怪しげな目附で見ながら、話は主に安藤にしてゐるのだが、主意は明らかに彼女を可笑しがらせて、笑はせることにあるらしく、その又女が、何處か六郎に似たげらげら聲でよく笑ふものだから、彼は益々調子に乗つて喋べり立てたものだ。その彼の話に依つて、私が驚いたことには、彼の経歴の豊富なことであつた、「僕は以前、人形町通りに今でももあるでせう、丸嘉といふ呉服屋、僕の内の薄い親戚になるんですが、その番頭をした事がありますよ。僕のある時分にはあの邊、濱町、蠣殻町の私娼の全盛時代でしたがね、殊にあの丸嘉などはお客様の七割まで私娼でしたよ。



私娼の中には随分素敵な別嬪がゐりましたね、それに大抵良いとこの娘の墮落したのが多いんですからね、藝なんかでもそれやよく出来るのがゐりましたよ。現に僕は三人まで新橋の藝者屋に世話しました、その中で一人、九州の或石炭商に引かされて、そのうちにその奥さんが死んだものだから、正妻に直つたのがありますよ。その女は今でも僕んとこへ寒さ暑さの見舞状をくれますが、字なんかでも、それや素晴らしく上手なものです。……」

「それで、半田さんも」と番頭の安藤は下つた目尻を益々下げながら、傍から口を出した、一平田さんもその中の誰かといふ仲になつて、その呉服屋さんを失敗つたといふ譯ですわね？」

「いやア」と六郎はその魚のやうな口を大いに開けて腕で頭を抱へながら、「白状しますと、さうなんですよ。僕はその女と、女といふのは東京の虎の門を三年迄行つてた者ですがね、學校の歸りに、雨の降つた日ださうですがね、俥に乗つたところが、その俥屋が悪い奴で、内に行くにしては随分變な所を、長い間走るわいと思つてゐると、やがて下ろされたのが立派な門構の家だつたさうですがね、轆を下ろして、まだ前幌を上げないうちに、玄關の中に向つて、『お客様だよ——！』と叫鳴るので、はッと思つてゐると、そこへ二三人の、ちやんと袴を穿いた書生風の男が現れて力任せに上へ連れて上つたんださうです。東京といふ所は恐ろしい所ですね、それから一週間目に蠟燭町へ賣られたんださうですがね、自分の女を自慢する譯ぢやありませんがね、それや素的な美人でしたよ。僕

は、後でやつぱり内から拂つてくれたんでせうがね、その時丸嘉の金庫から、親類だからといふので信用されてゐましたからね、五千圓近くの金を持出して、その女と朝鮮に墮落したものです……」

私は彼の面白さうな話を聞きながら、少しも答へないばかりか、變に淺ましさを感じて、背中の邊がむづ痒い氣がして來て、笑はうと努力しても、顔の筋肉にすつかりサボタアジュされてしまつて、強ひてやるとそれが澁面に違ひない苦笑になるのだつた。それは何も自分のことではない、人の事なのだから、彼が何をしようとして、何を言はうと、他人である私が心を痛めたり、背中のむづ痒さを感じたりする譯はないのだが、それは何のためか？ 私はいつも思ふことを思ふのである。——この世で最も悪いのは、不道徳でも、何でも無い、それは頭の悪いといふことなんだ、さう解釋して、辛抱して彼の無駄話を努めて平靜に聞かうとするのだが、これは自分のものでありながら、自分でどうすることの出来ないものと見えて、私の氣分は益々滅入るばかりなのだ。流石に無神経らしく見える六郎も、私の苦笑に氣が附いて變になつたと見えて、

「住友君は變な人だね」と彼は不足らしく言つた、「何か考へることがあるの？」

「いいえ、何にも」と私は恐縮して言つた。

「あの人のことでも思ひ出してはりまんねやろ？」と突然横手から、今迄黙つてゐた三日月眉の女が、上方者と見えて、こんな口を挟んだ。

「違ひない。」と安藤が手を拍つて叫んだ。

「よしちやんのことでも思ひ出してゐるんですか？」

「やあ、大出来、大出来！」と六郎が喜んで叫んだ。そして彼は安藤に向つて、

「安藤さん、あなたは、と左手で盃を持つ眞似をして、「この方は如何です？」

「決して嫌ひぢやないんですかね、」と安藤は強ひて馴れた表情を装ほつて、一ですがね、酒の方で私を嫌ひやがるもんですからね。……」

「どうしたと言ふんです？」と勘の悪い六郎は聞き正すのだ。

「私の方が好いても、大蔵省が許しませんものですから……」

「大蔵省つて？」と六郎は一寸首をひねつてから、漸く分つたと見えて、「ああ、財政ですか、財政

ですか、ハハハハハ。ぢやあ、今日は一つ僕が奢りませう。」そして三日月眉の女に向つて、あん

た、何とか言ふ名前でしたね、さう、さう、お紺さん、お紺さん、濟みませんけど……」と言ひなが

ら、袂から五圓札を一枚取出して、お紺に酒を買ひに走らしたものだ。「あの女は何です、やつぱり

藝者ですか、それとも娼妓の志願者ですか？」と彼は彼女の足音が、入口の外に消えるのを待ち兼ねて、斯う安藤に尋ねた。

「あれですか、」と安藤は目尻をぐつと下げて、それは何の意味でもなく、この男の物を言ふ時の表

情なのだ、そして言ふには、「あの女にはうちでも手子づつてゐるんですよ。大阪の府下の八尾とか

言ふ所の酌婦なんですがね、藝者になりたいと言ふんでね、もつとも糸道は少し位はついてゐるんで

す、調子がやつと合ふ位のことですがね。それで九十圓とか借金があるのを、四五日前に里見さんが

行つて向うの桂庵から貰つて来て、丸抱へですからね、そこは面倒はなくて、早速いらいちがあつて

嵌めたんですがね、あれにはすつかり一杯喰ひましたよ、……」

「どうしたんです？」と六郎は好奇の目を輝かして聞くのだ、「男でもあるんですか？」

「あるの、ないのつて、その位の事ならいいんですがね、」と安藤は稍稍得意になつた調子で言ふの

だ、一身持なんです、それがもう五ヶ月だといふんですからね、驚きましたよ。……」

「へエ！」と六郎。

「へエ！」と思はず私も叫んだ。「で、里見さんはその事で駆け廻つていらつしやるんですか？」

「ところが、里見さんは又そこどころぢやないんです、」と安藤は大きな小鼻をひこつかして言つ

た、「住友さん、——たしか御存知でせう、里見さんのお上さんを？」

「あの藝者になつた？」と私。

「ええ、あの人、」と安藤。「あの人、の後を追つ駈けて、夢中になつてゐるんですよ。」

「やつぱり外に男でも出来たんですか？」と私。

「いや、」と安藤。「あるかも知れませんが、まあ今のところありませんでせう。男はなささうですが、まあ、早い話が、里見さんが嫌ひで嫌ひで仕様がないうんですね。」

「それや困つたなあ、」と六郎が口を挟んだ。「そして安藤さんに岡惚れしたんですかね？」

「えへへへ、」と安藤は持前の目尻を一層下げて笑つた。「私と妙にうまが合ひましてなあ。しかし、あの人も氣の毒ですぜ、里見さんが又直あの大きな身體で腕力沙汰ですからな。何ほ何でも堪りませんよ。」

「それでどうしようと言ふんです、里見さんは？」と私は聞いた。

「どうしようにも斯うしようにも、お上さんの方で厭だと言ふんだから、仕様がありませんよ。そこへもう金のかかつてる身體なんですから、主人の方でも一緒になつて、里見さんに會はずまいとする、そこは此方はお手のもんで、いろいろに姿を變へてお茶屋や待合から掛けても見るとすが、それがうまく行かないらしいんです。金は掛りますしね。お蔭で奉公人の私等まで大迷惑ですよ、私等のなけなしの着物まで一寸貸せで、みな質屋へ入れてしまはれた始末です。何しろね……」

そこへ使ひに行つた身持女が歸つて來たので、氣狂が火を見たやうに、「さあ、酒が來た、酒、酒……」と六郎が力み出した。

そして、酒になると、六郎も元より飲むが、番頭の安藤もなかなか負けてはゐないのだ。それから

一頻り、二人のこの低能に近い人物が如何に叫び、唄ひ、且つ飲んだか、如何に安藤が里見の、今は藝者になつた細君に惚れられたか、どんな風に彼女が色つぼく彼に話しかけたか、と繰り返し繰り返しのろけたか、半田が如何に兩肌を脱いで、譯の分からぬ唄を囀りながら、躍り出したか、ここにそれ等の叙述はくどいから省かう。そしてそのうちに、どちらから言ひ出したともなく「さあ、行かう、」行かうとも、「なアに、この位の酒に參つてお堪りこぼしがあるものか、」大丈夫、行かう、などと、まるで敵打にでも出かけるやうな勢ひで、「そんな足付で大丈夫か？」半田君、今夜は止して呉れ給へ、と私が止めるのも聞かずに、二人は何處とも言はずに大元氣で出て行つてしまつた。

彼に残された私の困り方は一通りではなかつた。男の私でさへもさうだから、女の、殊に身持の、たよりないお紺は、さぞ心細いことだらうと察して、私は傍にあつた新聞を取上げて拾ひ讀みしたり、又それを傍に置いて何事かを考へるつもりで、その實何事も考へなかつたことだが、鹿爪らしく腕組などをしながら彼女の様子を窺つて見たところが、彼女は風俗壞亂見たいにだらしない恰好をして坐りながら、その眞黒い、水に浸つて膨脹した大根のやうな兩腕を火鉢の縁に乗せて、先にも言つたやうにそれが瀬戸物製なので、私などには二分間以上手の平をそれに押し付けてゐると熱さに堪えられないのを、それが彼女は血の代りに水でも通つてゐるのだらうと思はせた程平氣で置いてゐるのだ。そしてちやんとしてゐても餘り利口さうでない顔を、白粉がところまたらに剝けた平面の

顔にちよこなんと附いた口を半開きにして、尙一層阿呆見たいな表情にして、こくりこくりと居眠りをしてゐるのだ。それを見て、私は、先には、男の私が餘り心配さうな顔をしてゐると、女の彼女が尙心細がるだらう、別に縁も由縁もない人間だが、「袖振り合ふも他生の縁」だ、哀れに思つて、最早讀むところもない新聞を、拾ひ上げては讀むやうな顔を装つてゐたものだが、今は何の遠慮も入るものかと思つて、私は大つびらに腕組をしたものだ。やつぱり女はこくりこくりと、先よりも次第に激しく居眠りをやつてゐるのだ。が、又考へて見ると、腹の中にまだ獨立の出来ない生き物を一人入れてゐるのだから、これは並々ならず疲れてゐるのに違ひない、身體の疲れで、心配などをしてゐる頭の働く暇がないのだらう、と思ふと、やつぱり哀れになつて、私は何とか言葉をかけてやらうと思つたことであつた。

「きみ、此地の方は始めての？」と私は聞いてみた。

「ええ？」と彼女は吃驚した様子で、その顔に不調和な三日月眉の下のきよとんとした目を開いて、私の顔を見て眞から眠つてゐたものと見えて、私の言葉を聞き返すのだ。

「關西の方から此地へ来たのは始めてなの？」と私は再びくり返した。

「へえ、」と彼女は大儀さうに答へた。

「お父さんやお母さん？」と聞くと、

「お父つあんはおまへん、お母んの旦那がおます。」と意味の通じないことを言ふのだ。即ちよく聞いて見ると、父親は彼女の幼い頃に死んだらしく、母親はもう四十歳になるのださうだが、旦那取りのやうな事をしてゐるらしいのだ。彼女はその母親の本當の腹から生れた唯一人の子なのださうだが、「お母んは、一寸もわたいを可愛がつてくれしまへんね、」と彼女は少し足りないやうな表情で、足りないやうな物の言ひ方をするのだ。つまり彼女の母親は、旦那取りとは言ふものの、極めて金廻りのよくない旦那を、半分は彼女の方でも男狂ひをするやうな調子で持つものだから、始終生活が樂でないために、一人娘の彼女を小さい時から奉公に出して、十六の時から田舎料理屋の女中にして、彼女から、これも亦決して大金でない金を貢がしてゐたらしいのだ。そのうちに今度娘の彼女が身持になつたので、奉公先から母親の元に歸されたのだが、母親はひどく怒つて、それに丁度彼女自身も悪い男に引掛つてひどく苦しんでゐた時だつたので、娘の身持を隠さして、或桂庵とぐるになつて、大阪から遙々と、こんな横濱三界へ來させるやうな目に遭はしたらしいのである。

「それで、そのお腹の子供のお父つあんといふ人はどんな人？」と私が聞くと、

「それがな、」と醜婦のお紺は、そこだけ特別に赤く白粉の剝げおちた、丸ん丸い鼻を、風でも引いてゐるのか、亂暴についついとすすりながら言つた。「それがあんな、誰や分りまへんね。」

その言葉に私は思はず吹き出しさうになつたのを、やつとのことで軽い笑ひにまぎらして、一寸應

答する言葉がないので黙つてゐたところが、妙にセンチメンタルな氣分に襲はれて、と言つて、別にドストイエフスキイに倣つて、この哀れな、無智な女のために悲しむ氣分に襲はれたといふのではなく、さりとて彼女と共にこの世に濱の眞砂と盡きぬところの無責任な薄情男を恨む思ひが起つたといふでもない、唯妙にゑたいの知れないうそ情ないやうな、泣けて来るやうな衝動が起つて來たので、ぐつと三遍唾を呑み込んで、あらぬ天井の方に目をやりながら、

「どうです、お紺さん」と軽い調子で言つて見た、「一つ三味線でも弾いてくれませんか？」

すると、お紺は少しも顔の表情を變へずに、坐つた坐蒲團のままぐるりと身體を廻轉させた。ついで今先までも弾いてゐたと見えて、すぐ彼女の後に駒も外さないで、調子も緩めずに置いてあつた三味線を取上げて、又ぐるりと坐蒲團ぐるみに私の方に向つて廻轉して、調子の狂つてゐるのもおかまひなく、持前の變に皺枯れた聲を上げて、「うちのお父つあんは芋が好き……トヨトツト」とラツパ節をやり出したもので、そして一節うたひ終ると、三味線の手だけは止めずに、お紺は私に向つて

「さあ、どうです、一つ。」とうたふことを勧めるのだ。

「ラツパ節は困つたなア。」と言つて私は呆氣に取られたものだ。すると彼女は私が唄の文句を知らないのだと認めて、

「今鳴る時計は十時半ンン、あれならやれますやろ？」と自らうたつて見せて

「さあ、」と三味線をかき鳴らして促すのだ。

「出來ないんだよ、僕は唄は。」と私が閉口しながら言ふと、

「そんなら、」と彼女は益々勢ひを得て、「わたいがやりますさかい、あんた、附いてうたひなはれ、」と更に追求して止まぬのだ。

「神よ、かかる女を憐れみ給へ！」私は翻譯すると、斯ういふ意味のことを腹の中で絶叫しながら、もうそれ以上口に出して彼女に應ずる言葉を見出すことが出來なかつたので、黙つてしまつた。そこで彼女にいくら催促されても、例の顔の筋肉のサボタージュに支配されてしまつて、笑顔をつくつて應じようとしても、顔面が硬ばつたやうになつて、その上は泣き出すより仕方がない氣分になつてしまつた。そこで、私は、

「お酒を一杯くれ給へ。」と言つて、平素たしなまない酒を、半田たちが飲み残して行つたのを一杯についで、一杯二杯とがぶ飲みをすることに依つて、その場をこまかさうとした。が、慣れぬ酒が辛くて、むせて、一杯か三杯飲んでゐるうちに頭がふらふらして來て困つた。「何だか氣持が悪くなつた、」とそこで私は獨言のやりに言つて、一寸失敬して、横になりまますよ、と彼女に斷つて、その場に手枕で仰向けに寝そべつた。彼女は私がそんな變涎な氣分と、併せて慣れない酒を飲んだ爲とから、さうなつたとは知らないものだから、

「どないぞしやりましたんか、何ぞ薬買うて来まよか？」と一寸心配さうに聞いたが、私が何でも  
ないすぐ癒るからと答へると、やつぱりそのまま調子の違つた三味線で、ラツパ節をつゞけてゐた。  
が、暫くして、私がもう殆ど気分を回復して、大分手足の寒さを覚えて来たものだから、起き上ら  
うかな、いやいやあの三味線を止めてから、起きよう、この女、さつきから二上りでラツパ節ばかり  
やつてゐたと見えて、それがもう二の音締が大きに緩んで来て、調子が狂つてゐるのに気が付かない  
のだな、何にしても早く止めやがつたらいいのに、などと思つて居た時、突然、機械が止まつたやう  
に彼女の唄と三味線とがばつたり止んだ。私はこれはいい鹽梅だ、俺の一念が通つたかな、さあ起き  
上らう、と思つてゐると、

「あんたはん、」と彼女が聲をかけた。「あんたはん、今夜ここにお泊りなはりまつか？」

「さあ？」と私はやつぱり寝ながら言つた。が、私は心のうちで、今夜六郎の歸りは遅くなるに違ひ  
ないし、彼と行動を共にしない限り、私一人どうしようといふ力もない、こんな内に泊りたくはない  
が、と言つて、東京の木戸參三の下宿に行くにしても、そこへ行く電車賃がないのだから、どうせ今  
夜は厭でもここに泊らなければなるまい、とは知つてゐたが、さう言う事をはつきりと口にいふだけ  
でもあまり感じがよくなかつたので、「さあ？」とわざと考へる風を装つて、「まだはつきり定つてゐ  
ません、」と答へた。すると、寝ながら彼女の方を見ると、お紺はその柄にない三日月眉を美人見た

いに悲しげにひそめて、

「あんたはん、」と頼むやうに言ふには、「泊つとくはなはれえな？」

「どうして？」と私が不審に思つて聞くと、

「安藤はんがなア、」と彼女はその極めて表情のない顔附で言ふには、「安藤はんがなア、わたいを口  
説きはりまんね、そして夜這ひに来やはりまんねもん……」

「それや困つたな。」と言つたが、私は再び起き上る元気が忽ち叩き潰されたやうな感じに襲はれた。

そして半分口の中で、「僕も泊ります……」と言つた。

「さう、そんなら、あの半田はんたら言ふ人も泊りはりまんねやろな、」とお紺は言つた。「そしたら  
みんなで並んで寝まひよなア。」

そして、私は仰向けに腕枕をしたままで、少々ならず寒さを感じながら、いつとなくうたた寝をし  
てしまつた。私はさうして、大凡どの位の時間を眠つたものか、何でも、私の枕元で、

「住友君、起き給へ、さあ、お土産を買つて来たよ、」といふ半田の濁聲と、

「住友さん、お紺さんはどこへ行きましたか？」といふ安藤の鼻にかかる聲が、而も酒の加減で呂律の  
廻らぬ聲で響くのを聞いて、半分寝呆けて、飛び起きた。そして、

「もう何時ですか？」と聞いたたら、

「一時過ぎですよ」「いいや、もう二時前ですよ、」といふ答へだつた。

そこで、漸くはつきり目を醒まして、見ると、半田が片手に何か折詰のやうな物をぶらぶらさせながら、躍るやうな恰好をして、安藤の肩につかまつてみると、安藤は又相手にさういふ風にされてゐることに依つて、彼自身の身體の安定を保つてゐるといふ恰好で、二人とも申し分なく眞赤な、酩酊の顔色で突つ立つてゐたのだ。その時、私は、ふと、今安藤に、お紺さんはと聞かれた？ ことを思ひ出して、

「お紺さんは？」と私の方からもさう聞きながら、きよろきよろとあたりを見廻したが、彼女の姿が見えないのだ。

そこで、さすが商賣柄で、安藤は半田をその場に坐らしておいて、よろよろする足取で玄關に下駄を調べに行つた様子だつたが、

「あッ、下駄がない！」と彼がその方から叫ぶのが聞えた。「これや失敗つた、あの女、ずらかりやがつたな！」

その通り、安藤は、その晩は酒の勢ひで、「なアに、あんな身持で、どこに行けるもんか？」と安心してゐたことであつたが、翌日になつても翌々日になつてもそのままお紺は再び里見の内に姿を現はさなかつたのであつた。

(福山製本)

昭和七年十一月七日印刷  
昭和七年十一月十一日發行

改造文庫 第二部 第九十三篇  
苦の世界 定價三十錢

著者 宇野浩二

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七ノ十二

印刷者 森江有三

東京市品川區北品川四ノ五六四

發分

東京市芝區新橋七丁目十二番地

改

造

社

振替口座東京八四〇二番  
電話之(43)  
二二二二番  
二二三二番  
四三三番

(株) 株式會社 文藝社 印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犠牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

改造文庫第一部目錄

富國論(上卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	8	古代社會(上卷)	モルガン著 荒畑村村譯	5	共産主義小兒病	レイニン著 荒川實藏譯	3
富國論(中卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	古代社會(下卷)	モルガン著 荒畑村村譯	5	農村問題	レイニン著 荒川實藏譯	3
富國論(下卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	エミール(上卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	労働組合論	藤井米藏譯	3
富國論(下卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	エミール(下卷)	ルソウ著 内山賢次譯	4	幸徳秋水集	幸徳秋水著	2
人口論	ロバート・マルサス著 マルサス著	近	國家論	オウベン・ハイター著 廣島定吉譯	2	中江兆民集	中江兆民著	2
經濟學原理	デビッド・リカード著 リカード著	近	金融資本論	猪俣津南雄著	4	財産起源論	レイニン著 レイニン著	1
經濟學原理(上卷)	ステュアート・ミル著 ミル著	近	日本開化小史	田口卯吉著	2	組織論	鈴木厚著	3
經濟學原理(下卷)	ステュアート・ミル著 ミル著	近	日本經濟論	田口卯吉著	1	三民主義	孫中山著 孫中山著	3
經濟學方法論	カール・メンガー著 メンガー著	近	日本經濟學說の要領	田口卯吉著	1	唯一者とその所有	ステイルネル著 ステイルネル著	6
社會主義の發展	エンゲルス著 エンゲルス著	1	日本商業史	横井時冬著	4	世事見聞録	武陽隱士著 武陽隱士著	4
辯證法的唯物觀	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	2	日本工業史	横井時冬著	4	金融資本論	ヒルファディング著 ヒルファディング著	7
哲學の實果	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	2	經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2	近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	2
神と國家	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	1	リッケルト論文集	リツケルト著	2	近世の農村問題	本庄榮治郎著	3
婦人論	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	1	フッサール論文集	フッサール著	近	マルクスの歴史、社會並に國家理論(上卷)	クノール著 クノール著	近
婦人論	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	1	女工哀史	細井和喜藏著	4	マルクスの歴史、社會並に國家理論(下卷)	クノール著 クノール著	近
婦人論	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	1	婦人解放論	スチユアート・ミル著	近	マルクス主義經濟學	河上肇著	3
婦人論	デイヴィッド・ヒューム著 ヒューム著	1	社會の進歩と地位	ラッパポルト著 山川菊榮譯	2			

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。  
 □此の文庫に收容するものは、東西古今百種の書に互り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。  
 □此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百種に及ぶ。  
 □表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。  
 □一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附録等挿入の場合、は、必らずしもこの例に依らず。  
 □表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。  
 □定價及び送料左表の如し。

送料(錢)	定價(錢)	表紙背の符號
二	一〇	1
四	二〇	2
六	三〇	3
八	四〇	4
一〇	五〇	5
一二	六〇	6
一四	七〇	7
一六	八〇	8



改造文庫第二部目録

古事記 澤田久孝校訂 刊近
萬葉集(上巻) 折口信夫校訂 刊近
萬葉集(下巻) 折口信夫校訂 刊近
古今集 吉澤義則校註 刊近
新古今集 吉澤義則校註 刊近
新源氏物語(上巻) 折口信夫校註 刊近
新源氏物語(下巻) 折口信夫校註 刊近
枕草紙 山岸徳平校訂 刊近
金槐集 幸田露伴校註 刊近
平家物語 吉澤義則校訂 刊近
雨月物語 山口岡校訂 刊近
山家集 齊藤茂吉校註 刊近
俳諧七部集 萩原羅月校訂 刊近
蕪村七部集 萩原羅月校訂 刊近
伊勢物語 久松潜一校訂 刊近

神皇正統記 宮地直一校註 刊近
芭蕉翁細文集 萩原羅月校訂 刊近
曾根崎心中 黒木勲校註 刊近
阿波油地獄 黒木勲校註 刊近
冥途飛脚 黒木勲校註 刊近
國姓爺合戦 黒木勲校註 刊近
槍權三重帷子 黒木勲校註 刊近
夕霧阿波鳴門 黒木勲校註 刊近
心中重井筒 黒木勲校註 刊近
丹波與作 黒木勲校註 刊近
山崎與次兵衛 黒木勲校註 刊近
門松心中宵庚申 黒木勲校註 刊近
傾城反魂香 黒木勲校註 刊近
從鯉出世籠 黒木勲校註 刊近
長門女腹切 黒木勲校註 刊近
堀多小女郎波 黒木勲校註 刊近
博多小女郎波 黒木勲校註 刊近
大経師昔縁 黒木勲校註 刊近
菅原傳授手習鑑 黒木勲校註 刊近
假名手本忠臣蔵 黒木勲校註 刊近
八百屋お七歌祭文 黒木勲校註 刊近
染久松杖の白紋 黒木勲校註 刊近
伊賀越道中 黒木勲校註 刊近
一谷燈籠 黒木勲校註 刊近
大鏡 吉澤義則校註 刊近

徒然草 吉澤義則校註 刊近
日蓮上人集 刊近
親鸞聖人集 刊近
北村透谷選集 鳥崎藤村編 刊近
樋口一葉選集 樋口一葉著 刊近
平凡 三葉亭四迷著 刊近
子規俳話 正岡子規著 刊近
子規歌論歌話 正岡子規著 刊近
坊つちやん 夏目漱石著 刊近
草枕 夏目漱石著 刊近
それから 夏目漱石著 刊近
悲しき玩具 石川啄木著 刊近
我等の一團と彼 石川啄木著 刊近
山陰土産その他 鳥崎藤村著 刊近
白秋民謡集 北原白秋著 刊近
獄中記 神近市子譯 刊近
厭世家の誕生日 佐藤春夫著 刊近

哲學概説 桑木殿賢著 刊近
現代哲學思潮 桑木殿賢著 刊近
カントの平和論 朝永三十郎著 刊近
天才論 ロンブローゾ著 刊近
フランス革命史上 クロポトキン著 刊近
フランス革命史下 淡徳三郎譯 刊近
無政府主義と 百瀬二郎譯 刊近
財産進化論 ラフワルグ著 刊近
帝國主義論 レイニン著 刊近
帝國主義論 岡田宗司譯 刊近
勞働價值説の擁護 石澤新二譯 刊近
經濟地理概論 ヒルファディング著 刊近
經濟發達史論 堀本三吉譯 刊近
プレブス經濟學 プレブス・リッゲ編 刊近
心理學概論 内田佐久郎譯 刊近
社會意識學概論 田所輝明譯 刊近
經濟科學概論 小宮義孝譯 刊近
ボグダーノフ著 刊近
林・木村共譯 刊近

我等の對立 プレハノフ著 刊近
マルキシズム方法論 アドラー著 刊近
倫理と唯物史觀 カウツキー著 刊近
社會進化と 荒畑寒村譯 刊近
原始財産 長野兼一郎譯 刊近
唯物論(上) 山川大森譯 刊近
唯物論(下) 山川大森譯 刊近
近世資本主義 住谷松澤本譯 刊近
近世資本主義 住谷松澤本譯 刊近
社會主義への道 大橋積譯 刊近
シズム論 アラピンスキ著 刊近
阿片溺愛者の告白 住谷松澤本譯 刊近
經濟學概説 住谷松澤本譯 刊近
エルツ綱領解説 カウツキー著 刊近
マルクス經濟學大綱 ボルハルト著 刊近
唯物辯證法の 佐多忠隆譯 刊近

キリスト教の本質 フォイエルバッハ著 刊近
ソヴィエトロシアに於ける農業政策 田中勝太郎譯 刊近
宗教及び信仰の起源 玉城 肇譯 刊近
カウツキー宛の手紙 ルッセンブルグ著 刊近
英國勞働運動小史 稲岡 暹譯 刊近
第一インターナシヨナル史(第一部) ステークロフ著 刊近
第一インターナシヨナル史(第二部) ステークロフ著 刊近
日本美術の知識(上巻) 中村亮平著 刊近
日本美術の知識(下巻) 中村亮平著 刊近
レーニン主義の基礎 スターリン著 刊近
國家論 鈴木安蔵譯 刊近
(以下 續刊)

日輪	横光利一著	1	自選空を仰ぐ	土岐善麿著	2	一青年の告白	辻ヨシ・ムーア著	3
労働者の居る船	葉山嘉樹著	1	白秋童謡集	北原白秋著	2	一週間	辻ヨシ・ムーア著	3
海に生くる人々	葉山嘉樹著	2	白秋國民歌謡集	北原白秋著	2	室生犀星詩集	室生犀星著	5
小公子	若松隆子著	2	白秋舞踊詞集	北原白秋著	2	千家元麿詩集	千家元麿著	3
ホワイト・ファンク	堀利彦著	3	背徳者	石川 澄著	2	横瀬夜雨詩集	横瀬夜雨著	5
はやり唄	小杉天外著	3	チエホフ書簡集	内山賢次著	5	修禪寺物語	岡本綺堂著	3
朝の螢	齊藤茂吉著	2	鴛の卵	土岐善麿著	3	少年の悲哀	岡本綺堂著	3
十年	島木赤彦著	2	愚庵歌集	齊藤茂吉著	3	運命論者	國木田獨步著	2
川のほとり	古泉千櫻著	2	芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	3	愛	武者小路實篤著	2
松の芽	中村憲吉著	2	茶一七番日記(上巻)	萩原井泉水校訂	4	作者別萬葉全集	土岐善麿編著	6
海やまの	釋 超空著	4	茶一七番日記(下巻)	萩原井泉水校訂	4	作者別萬葉以後	土岐善麿編著	6
立春	木下利玄著	2	おらが春	萩原井泉水校訂	4	自傳	片山 蒼著	3
花檉	北原白秋著	3	新花つみ(日村)	萩原井泉水校訂	3	日本橋	泉 鏡花著	5
人間往來	興野野品子著	2	寡婦マルタ	オルゼシエコ著	3	佛國西童話集(第一)	ボーマン夫人著	3
野原の郭公	若山 牧水著	2	句集 虚子	高濱 虚子著	6	佛國西童話集(第二)	ボーマン夫人著	3
原生林	前田 夕暮著	3	井泉水句集	萩原井泉水著	5	佛國西童話集(第三)	ボーマン夫人著	3

死の舞踏	山本有三譯	2	陸の人魚	菊池 實著	4	新人國記	ア・ラフランス著	4
奈落の人々	和氣律次郎譯	3	第二の接吻	菊池 實著	3	シラー詩集	小栗孝則譯	4
争鬪	和氣律次郎譯	2	東京行進曲	菊池 實著	3	生きているおいらは	トモラ ア著	2
無名作家他(短篇小説)	菊池 實著	5	結婚二重奏	菊池 實著	3	獄窓から	和田久太郎著	5
出世七篇(短篇小説)	菊池 實著	4	不壊の白珠	菊池 實著	3	結婚の悲劇	アルツイバシエフ著	5
恩讐の他(短篇小説)	菊池 實著	5	イブセン全集(一)	河野永田小寺譯	3	苦難の路(上)	アルツイバシエフ著	4
彼方に(短篇小説)	菊池 實著	5	イブセン全集(二)	河野永田小寺譯	3	苦難の路(下)	アルツイバシエフ著	4
噂の發生(短篇小説)	菊池 實著	4	イブセン全集(三)	中村 仲木譯	5	芭蕉書簡集	萩原 隆月著	3
父歸る(短篇小説)	菊池 實著	5	イブセン全集(五)	大山大助中村譯	5	矢鳥柳堂	志賀直哉著	2
藤十郎他(戯曲)	菊池 實著	5	ボルシエヴイ	ビクトリツキ著	4	焚火	志賀直哉著	2
眞珠夫人	菊池 實著	6	キの手記	三矢 剛譯	4	老	志賀直哉著	2
慈悲心鳥	菊池 實著	4	聖書物語(舊約の巻)	ル 近市子譯	3	網走りまで	志賀直哉著	2
新珠	菊池 實著	5	聖書物語(新約の巻)	ル 近市子譯	3	速夫の妹	志賀直哉著	2
火華	菊池 實著	4	洋服箆筒	トーマスマン著	2	好人物の夫婦	志賀直哉著	2
受難華	菊池 實著	5	今戸心中	廣津 柳浪著	3	雪の日	志賀直哉著	2
赤い白鳥	菊池 實著	3	嬰兒殺し	山本有三著	3	暗夜行路	志賀直哉著	3
明眸禍	菊池 實著	5	芭蕉・夜船・草の詩	吉田 敏二郎著	3			
新女性鑑	菊池 實著	3	ドレフニス事件	大佛次郎著	3			

短歌集	石川 啄木著	4	國歌八論	土岐 善廣編	3	角兵衛物語	長谷川 伸著	(近)
詩集	石川 啄木著	5	性に眼覺める頃	室生 犀星著	(近)	唐人お吉	十二谷義三郎著	(近)
小説集(上)	石川 啄木著	6	多情佛心(前篇)	里見 淳著	3	時の敗者・唐人お吉	十二谷義三郎著	(近)
小説集(下)	石川 啄木著	5	多情佛心(後篇)	里見 淳著	3	笑ふ男・笑ふ女	十二谷義三郎著	(近)
評論感想集(上)	石川 啄木著	4	苦の世界	宇野 浩二著	3	或る女(上卷)	有島 武郎著	(近)
評論感想集(下)	石川 啄木著	(近)	山戀	宇野 浩二著	(近)	或る女(下卷)	有島 武郎著	(近)
書簡集(上)	石川 啄木著	5	天保赤門黨	土師 清二著	(近)	有島武郎書簡集	有島 武郎著	(近)
書簡集(下)附年譜	石川 啄木著	4	血染のパイプ	甲賀 三郎著	4	神變麝香猫(上卷)	吉川 英治著	(近)
選歌集	石川 啄木著	(近)	平妖傳(上卷)	佐藤 春夫著	(近)	神變麝香猫(下卷)	吉川 英治著	(近)
信綱文集	佐佐木 信綱著	2	平妖傳(下卷)	佐藤 春夫著	(近)	(以下續刊)		
三人	島崎 藤村著	3	都會の憂鬱	佐藤 春夫著	(近)			
海へ	島崎 藤村著	5	自選短篇集(上卷)	林 房 雄著	(近)			
出	島崎 藤村著	4	自選短篇集(下卷)	林 房 雄著	(近)			
痴人の愛	谷崎 潤一郎著	4	大暴風雨時代	前田 河廣一郎著	(近)			
愛すればこそ	谷崎 潤一郎著	3	淺草紅團	川端 康成著	(近)			
愛なき人々	谷崎 潤一郎著	3	女性讚	片岡 鐵兵著	(近)			
草雙紙選	尾崎 久彌編	5	喧嘩駕籠	長谷川 伸著	(近)			

569  
142

